30
484

國文故事熟語正解

文學士 山岸辰藏 著

東京 修學堂書店

30-484

文學士 山岸辰藏 著

國文故事熟語正解

附國語略解

帝國圖書館藏

東京 修學堂書店
文海堂書店

明治39年10月10日 交付

自序

我が邦に於ける古來故事と稱せらるゝもの其の數誠に少なからず、初學の人々にありては、これが解説をなす能はざるのみならず、其の出所來歴等に就いては、恰も風を捕ふるが如き感じありとか聞きぬ。よりて夙にくさ〳〵書き集めたりし中に就きて。成るべく廣く用ひらるゝものゝ、さては熟語等の解しがたしと認めらるゝものを拔き、五十音列に配置して僅に此の書とは

なりぬ。もとより小册子のことゝて、廣く網羅す
ること能はざるを遺憾とす

明治三十九年十月

篇者しるす

例言

一　國文の故事、熟語は、其の數、いとさはなるべければ、小册子のとても網羅し盡し得べきにあらぬは勿論なり。されど、左までの必要もなきもの多かめれば、其を除きて、もはら、中等教育を受けつゝある人達、さては、尙ほ進んで、高等の學校に入らんとするものゝ爲めに、啣か、其の參考の資にもならんかしと思ひて、此の書を公にするに至りぬ。

二　各語は、字母の順序を追ふて排列し、其の語中に在るもの、即ち第一、第二、第三、第四などの順序も亦是に依れ

ること勿論なり。

三　各語の直下に、括弧中に、名、代、自動、などの文字を挿入せり。即ち名は名詞、代は代名詞、自動は自動詞、他動は他動詞、形は形容詞、副は副詞、感は感動詞、接尾は接尾語、接頭は接頭語、枕は枕詞などを示すものにして、其の略語とす。

四　此の書に載する所の解釋は、古人の物せられし著作に依りて、考證の確なるものゝみを採りたり、又其の引用せし出所などに就いては、之を擧げんとはなしたるも、左までのものにもあらざるべしと思ひて、省きぬ。

五　此の書を公にせしは、前に述ぶるがごとくなれば、成るべく解釋を平易ならしめんことを欲し、行文の如きも、通俗に從ひぬることゝなしにき、是は、大方博雅の君子に見せんとてにはあらざればなり。

明らけく治まる三十九年
の春六の花を見つゝ

編者誌

索引

あ……一　い……三一　う……四八　え……六四　お……六五
か……七四　き……九三　く……九六　け……一〇五　こ……一一〇
さ……一一九　し……一二九　す……一四一　せ……一四八　そ……一五八
た……一六九　ち……一九五　つ……一九九　て……二〇二　と……二〇七
な……二二〇　に……二三九　ぬ……二四六　ね……二四九　の……二五一
は……二五六　ひ……二七二　ふ……二八一　へ……二八五　ほ……二八七
ま……二九七　み……二九八　む……三〇四　め……三〇八　も……三〇七
や……三一二　い（ヤノイニアリ）　ゆ……三一八　え（ヤノエニアリ）　よ……三二一
ら……三二三　り……三二五　る……三二九　れ……三三〇　ろ……三三二
わ……三三七　ゐ……三五一　う（ワノウニアリ）　ゑ……三五五　を……三六〇

國文故事熟語正解

文學士　山岸辰藏編

（あ）

あいさ（名）　鳥の名なり。「あさざ」の音便。其の部に詳記す。

あいぜん（名）　梵語なり。佛經にいふ明王の一とす。其の相貌は、三面六臂にして頂に獅子の面を被れり。頗る威嚇憤怒の相を備ふ。漢字にて愛染と記す。

あいだちなし（形）　「あひだちなし」の音便なり。其の部に詳記す。

あいだてなし（形）　「あいだちなし」より轉訛したるものにして、「あひだちなし」と同じ。

あいたどころ（名）　「あしたどころ」の音便なり。其の部に詳記す。

あいたんどころ（名）「あいたどころ」の音便にして、「あしたどころ」に同じ。

あいだる（自働）「あまえたる」又は「あまや」などゝ同じ意義なり。「あい」は愛の音なり。

あいなだのみ（名）頼み甲斐なき頼みをいふ。換言せば、俗に所謂目的にならぬ頼みのことなり。

あいろ（名）文目に同じ。「あいろも分かず」など云へることなり。

あうん（名）阿呼にして佛經の語なり。息の出入することの稱なり。

あうなき（動）奥ぶかき考のなき意に用ふ。源氏物に云ふ、わかき人のこゝろざま「あうなからぬ」をかたらひて、とある即ち是れなり。

あらう（名）足占なり上古に於ける占の一種の法にして、足にて蹈みて行ひたるものなり。

あえかに（副）「かよわく」又は「たよわく」などの意にして、危げにと云へると同意義なり。

あか（名）閼伽にして梵語なり。佛に供すべき水又は香水を盛る所の器物の名なり。又轉じて佛に手向くる水にも用ふ。即ち閼伽桶に樒を挿して、など云へるは、是れなり。又船底に溜る所の水をば舟人の語にてこれを淦といふ。

あかあかと（副）甚だ明しといへる意義なり。

あかかがち（名）「ほゝづき」に同じ。草の名なり。

あかがさ（名）赤瘡にして麻疹の古名なり。幼兒の「あかゝさ」を病みて臥せるさまのあはれなる、など見ゆ。

あがき（名）足掻くと云ふことなり。

あかぎぬ（名）緋色の袍にして赤衣といふことなり。

●あかし　●あかち

あかし（名）燈明を云ふ。又「あかり」とも云ふ。明しなどの類なり。

あかし（名）物事を證據だつること、即ち確實なる證據の義なり。

あがせ（名）又「あがせこ」ともいふ。即ち吾兒なり。又朋友夫をも指して云ふことあり。萬葉集に、吾せこが古家の里のあすかには、とあるなど是れなり。

あがた（名）上古に在りて、諸國にありし朝廷が御領有の土地を云ふ。上り田の義なるべしといへり。後世縣主の治むるところの一區域をも云ふ。

あがたぬし（名）縣主にして上古に在りて縣を治むるところの職名なり。是は世襲とす。

あがためし（名）縣召なり。詳に除目の部に記す。

あがち（名）分つことの古語なり。

あかとき（名）曉にして夜の明方を云ふ。明時なるべきか。

あかねさす（枕）日の枕詞なり。赤根刺すにして、太陽の邊には、赤き氛氣ありて、茜を刺したるがごとく見ゆるものなれば、期くは日に掛けて云へる枕詞となりしなり。又晝にも掛けて言ふことあり、是は、日と云ふより移したるものなるべし。又顏のはのあかきに掛けて言へるものもあり。「あかねさす君のこゝろざし」など、是は顏のにはしく色づける心にて、君と掛けたるものなり。

あがふ（他動）購ふの古語なり。

あかまる（自動）「あかばむ」に同じ。其の條下に詳記す。

あがむ（他動）尊崇すべきものとして、取扱ふこと。即ち尊び敬ふ事なり。

あかめ（名）鯛の古語なり。

●あかと　●あかぬ

あかもがさ（名）　痳疹の古語にして赤疱瘡なり。

あがもの（名）　購物にして身の災禍を贖ひ放ふの意なり。

あからさまに（副）　かりそめに、知らず〳〵して一寸など云ふ意なり。又俄に、又は忽ちといへる意にも用ふるなり。

あかる（自動）　夜の明けて、明るくなることを云ふ。

あかる（自動）　自然に戸の開くなどのことを云ふ。

あかゑむば（名）　赤蜻蛉のこと。

あき（名）　「あかにし」の古名なり。其の條下に詳なり。

あきつしま（名）　神代紀に秋津洲とあるもの是れなり。我が日本の古名、是れ日本國の形が、秋津虫即ち蜻蛉の飛べるに似たるより斯くは云ふなり。

あきびと（名）　商人に同じ。

あきのななくさ（名）　秋の七草にして、秋時の觀賞に供す。春の七草に對して斯くは云ふなり。萬葉集に云ふ、秋の野に咲きたる花を指折り、掻き數ふれば七種の花、芽之花、尾花、葛花、撫子之花、姫部志、又藤袴、朝貌之花（旋頭歌）云々と。朝顔は、牽牛花を指せるや、又は槿花を云へるや、詳ならざるが如し。現今に於いては、朝顔を桔梗に代ふるに至れるなり。

あきもの（名）　商賣用の物品は、すべて商物と云ふ、即ち商ふ品物なりとの意義なり。

あこがらす（他働）　「あこがる」に同じ。其の條下に詳なり。

あくがる（自動）　「あこがる」に同じ。其の條下に詳なり。

あくぶ（自動）　欠をなすことなり。

あぐむ（自動）　俗に所謂「あぐら」のことなり。兩の脛を打ちちがへ組み

●あけつ　●あこ

て坐したることなり。

あげつらひ（名）　物事を論爭することなり。

あげつらふ（他動）　道理を擧げて、言を述ぶるを云ふ。即ち論ずる義なり。

あげまき（名）　揚卷にして小兒の頭髮の結ひ方の名なり。即ち頭髮を左右に分ち、これを揚げ卷きて、兩の髻を結ひ、以て總角のごとくせるものなり。故に總角とも書す。又紐の結び方の名にもあり。即ち左右に輪を出し、中を石疊のごとくに結べるものなり。調度類の裝飾に供す。又桔梗貝といへる貝の久しく風波に曝されて、上落ちて下部のみの殘れるものにして、其の形恰も桔梗の花の開きたるがごときをも云ふ。

あこ（名）　吾子にして、自分の子を親しみ呼ぶ語なり。

あこぎ（名）　事の度重なるに用ふ。「逢ふことを、あこぎの島に、引く網の、たびかさならば、人も知らなむ」など。

あさい（名）　朝寢するを云ふ。又「あさまどい」とも云ふ。「まどい」とは寢ぬることなり。

あさかれひ（名）　朝の餉にして、朝食のことなり。又天皇の朝の供御をも云へり。又清涼殿内にありて、朝餉の間と云へる室あり、室は天皇の御膳所にして、單に略して朝餉とも云ふ。

あさげ（名）　朝食のことなり。又朝飯を炊ぐことにも用ふ。「あさげの煙」など。

あさなあさな（副）　朝朝の義にして、毎日朝ごとにと云ふ意なり。「な」は「あさなゆふな」の「な」の轉じたるなり。

あざなはる（自動）　糾ふ樣になることにして、即ち「まとはる」なり。

●あしき　●あしに

あざなふ（他動）　交へ合すことなり。繩を糾ふなどの類なり。

あさなゆふな（名）　朝飯と夕飯とのことなり。其の「な」は、飯肴の義を表はしたるものとす。

あさびらき（枕）　朝は港より船を出す義にして、漕げといへる枕詞なり。「あさびらきなぎにし舟」などあり。

あさまし（形）　驚くほどに甚しきこと。又意外に呆るゝことにも用ふ。是は善事にも、又惡事にも共通して用ひらるゝなり。又興の醒むることにも用ひらる。「まし」は添詞にして、淺き意思、即ち俗に所謂「あさはかなる心」のことなり。

あさまだき（副）　朝未だしとの義にして「あさまだき起きても見つる」などあり。朝はやく又夜の未だ明けやらぬ時を指す語なり。

あさむ（他動）　實に意外のことなりとて驚き呆るゝことなり。又思慮の十分ならずして淺薄なる考慮なりと貶するにも用ふ。又淺はかなりとて、これを賤しむときの語にも用らる。

あざやぐ（自動）　物事のわざやかになることに用ふ。

あさり（名）　漁することなり。

あさる（他動）　獸の食物を搜して飛び翔くることなり。又探り求めて搜すことにも用ふ。又魚貝を探り取るにも用ふ。

あしか（名）　簀なり。簀は竹又は葦などにて造りしものにして、恰も筏の如し。土を運ぶに用ふる所の一種の具なり。丸俣の功を一簀に缺くなどの類なり。

あしがちる（枕）　葦が散るにして、難波に掛くる枕詞なり。

あしがなへ（名）　鼎のことなり。

あしかび（名）　葦の穎にして、即ち葦の芽を云ふ。

あしぎぬ（名）　粗き絲を以て織り成せる絹を総稱して云へる語なり。

あしげ（名）　葦毛にして馬の色の名なり。即ち白き毛に黒き差毛のものを云ふ。

あしげ（名）　惡氣にして、惡き樣に言ひなすことなり。

あしげ（名）　足にて蹴ることなり。

あしけし（名）　惡き樣を云ふ。

あじさし（名）　鳥の名なり。其の形、稍燕に似て大きく、常に海上に翱翔するものにして、陸地に來ること稀なり。

あしたづ（名）　葦田鶴なり。通常の鶴にして、葦邊などに居るより斯くの如く云ふものなり、白き鶴を葦田鶴と云ふと某書に見えたれども、是は誤れるの甚だしきものなり。貫之朝臣の歌に「あしたづの、立てる川邊を、吹風に、よせてかへらぬ、波かとぞ見る」など見れなり。

あしたどころ（名）　朝所にして太政官内に在る間の名なり。音便に「あいたんどころ」又は「あいたどころ」など云ふ。

あしでがき（名）　和歌などを書くに、文字を崩して、葦の生ひ乱るゝがせき狀に書くことなり。即ち葦手書をす。

あしなへ（名）　足の蹇へて、行動の自由ならぬことにして、足蹇なり

あしびきの（枕）　山といふ語の枕詞にしして足引なり。又後には直ちに山をも指して云へる語となれり。

あしゆら（名）　阿修羅にして梵語なり。佛經に依れば、六界の一にして、其の果報諸天に隣次して天にあらずとす。略して單に修羅とも云ふ。

あじろ（名）　川瀬に於いて、杭を網代形に打込みて立て、これに縦貫を入れ、且つ竹にて編みたる簀を張りて、魚を捕ふる具なり。山城の宇治川に

於いて、嚴冬に魚を捕ふるに依りて名あり。延喜式に網代とあるもの即ち是れなり。

あじろぎ（名）　青竹を網代に編みて、外部を飾り、黑く塗りたる押緣を取りしものにして、板輿に次ぎて、晴の場合に用ふる所の輿なり。

あしわけをぶね（名）　草の生ひ繁れる所の水中をば、潛ぎわけつゝ行く小舟のことなり。萬葉集に「湊いりの、あしわけ小舟、障りさみ、我が思ふ君に、あはむころかも」とあるもの即ち是れなり。

あす（自動）　色などのはげて淡くなること、即ち色の褪すること。又川水などの淺くなることにも用ひらる。

あぜくら（名）　校倉にして、方形の材を横に組み揚げ、四隅に於いて打ち違へて、土墻の如くに造りたる倉を云ふ。是は、最も古代の製にして、稀に社寺などに於いて、寶物什器などを收藏するに用ふ。新猿樂記に又倉、下

學集に又庫とあるもの、即ち是れなり。

あぜち（名）　國司の能否を視察せしめんがために、朝廷より邊境に使を遣りしものにして、之を按察使を云ふ。是は、唐土の官名を襲用したるものなり。

あせび（名）　「あしび」「あせみ」「あせぼ」とも云ふ。木の名にして馬醉木と書す。其の高さ五六尺葉は細く且つ長くして鋸齒を備ふ。互生して冬枯るゝことなく、春に至れば、枝梢に三寸ばかりの穗を垂れて、小き白花の群り開くものなり。

あた（名）　我れに向ひて、害を加ふるものを云ふ。即ち仇なり。又怨恨あることにも用ふ。即ち仇を報ゆなど。又攻め來るもの我れを襲ふもの、即ち外國の寇なぞの類是れなり。

あた（名）　上古の尺度の名にして、其の長さは、拇指と小指とを充分に張

●あだ　●あたな

れる間の長なり。即ち咫の字を用ふ。

あだ（名）　物事の「むだ」になること。「いたづら」の意。「かりそめ」の意にも用ひらる。

あだくち（名）　眞實なき言葉、空言などを云ふ。即ち徒口。

あだごと（名）　「あだくち」に同じ。

あだしちぎり（名）　他契にして、其の契を振り捨て、更に他人に契を結ぶこと。

あだしびと（名）　他人にして、他の人なり。即ち親族にあらざる人々のこと。

あたなふ（自働）　寇をなすことなり。

あだなみ（名）　人の心のぐらぐらとして定まらざるに喩ふるに、動きて定まらざる波を以て比ぶる詞なり。徒浪

あだに（副）　「はかなく」、「かりそめに」などの義なり。又物事の「むだに」「いたづらに」、「無用に」なるなどにも用ひらる。

あだばな（名）　實を結ぶことなき花即ち徒花なり。

あたふ（自動）　爲すことを得る意なり。「あたはず」即ち「能はず」と云へば、爲すことが出來ぬとの意なり。

あたら（接頭）　「惜しむべき」、「惜しき」などの意に用ふ。「あたら御身」「あたら盛りの花を散らし」など。

あたり（副）　其の處に近き場所といふ義なり。「木蔭の近き邊」など。

あぢきなし（形）　無益のこと。又詮なしの意にも用ふ。又無味とて、面白味なしといへる所にも用ひらる。又「つらし」などにも用ふ。

あつけし（形）　熱しと云へるに相同じ。

あづさみこ（名）　梓弓の絃を鳴らして、神下を行ふ巫女のことなり。

●あたに　●あつさ

●あつさ　●あつま

あづさゆみ（枕）　引く、張る、音、本、又は末などに掛くる枕詞なり。

あづさゆみ（名）　昔梓にて作れる弓のことなり。武士の當に執るべき節操に付けて云へり。

あづさゐ（名）　紫陽花の古語なり。

あづち（名）　弓を射ることを習ふとき、的を掛くるがために、築造する所の土堤を云ふ。櫑又は射朶と書く。

あづま（名）　吾妻又は東とも書く。日本武尊、東夷を征服し、京に歸るの途堆氷嶺を經、たま〳〵東南を望見し、弟橘姫を追懷し、吾嬬耶と宣ひしに起因す。これより東國を指して、吾妻又は東と唱ふるに至れり。

あづまあろび（名）　神樂の類にして、摺衣を着たる六人が、舞を舞ふことなり。

あづまうた（名）　萬葉集、古今集などに登載したる東國人の詠歌の總稱

なり。

あづまごと（名）　琴の一種にして六絃を張る。是は神樂、雅樂に用ひらるゝものなり。日本古來の樂器の一なり。和琴又は「やまとごと」とも云ふ。

あづまぢ（名）　東路にして、京都よりして陸奥の國の東に到るまでの道路を云ふ。

あづまひやくくわん（名）　人の通稱に用ふるものにして左膳、求馬、多門、伊織など、即ち是れなり。是等は、昔關東武士の用ひしものにて、其の字面が、朝廷の百官に似たるを以て、斯くの〳〵と稱するに至れるなり。

あづまや（名）　四方に向けて、屋根を葺きおろし、これを四本の柱にて支持し、壁を設けざる家のごときものを云ふ。漢字にては、四阿と書く。

あつもの（名）　熱物にして現今の所謂吸物のことなり。源氏物語に「わかなのあつもの」と見えたるは、即ち是なり。

●あつま　●あつも

あて（名）　貴きこと、又貴くみやびなることを云ふ。貴人などの如し。

あてに（副）　貴くして品の好きことを云ふ。「あてなる女」、「あてにうつくしき」などの如し。

あてぶみ（名）　人に宛てんが爲めに、官より下す所の公文書なり、宛文と書く。

あてみ（名）　柔術家の語にして、峯にて人の急所を突くことなり。

あてやか（副）　品好くしてうつくしきことを云ふ。漢字にては、嬋妍の字に當る。

あど（名）　能の狂言に於ける脇師にして、相人を略したるものならんといふ。

あとうがたり（名）　「なぞ〳〵語」なりと云ふ。又物語の應答などを云ふ。

あとはかなし（形）　殘れる跡なきこと、又認識すべき痕跡だもなきことを云ふ。

あな（感）　常に言葉の初に置かるゝ語にして、事に感動して發する聲なり。嗚呼などと同じ。「あな戀ひし」、「あな恐し」など。

あなうら（名）　足の裏の轉じたる語なり。

あなかま（句）　あな喧しとの意なり。即ち制止すべき語とす。

あなぐる（他動）　探り求むる意なり。

あなし（名）　「あなせ」とも云ふ、西北の風なり。

あなする（名）　足の先なり。

あなない（名）　高きに上らんとする時、足掛りとなす所の具にして、材を組み立てゝ造りしものなり。又助くることにも用ひらる。

あなにく（句）　噫憎しとの意にて、生憎の字に當る。

あなはし（かみ）（名）生姜の異名。（中略）の字を當つ。又趣味のなきこと

あはあはし（形）（極めて淡きことなり。淡々の字を當つ。又趣味のなきこと

（中略）用ひらるるなり。）

あはゝく（自動）眼鏡曇きたと。

あはも（形）（色の淡かきことを云ひ。あつさりとしたるなど。又情

（中略）薄き（名）云ふ。（中略）

あはせ（名）飯に合せて喰ふ菜のこと。

あはせたるもの（名）（中略）煉香と同じ。

あはつ（自動）「あわく」の轉じたるものにして、周章の文字に當る。

あはつけし（形）浮きたる狀なり。

あはひ（名）二つの中を云ふ。家と家との間の如きを空所と云ふ。

あばふ（他動）かばふと同じ。其の條下を見るべし。

あはむ（他動）物事を疎む意。又人を疎んずるにも用ひらる。

あばら（副）荒れ果つることなり。「あばら家」など。

あはれ（感）天を仰ぎて感嘆する聲を云ふ。天晴と云ふに同じ。

あひおい（名）夫婦などの諸共に長く生存して居ることなり。是は相生を誤り轉じて、相老とせしものなり。

あひねひ（名）諸共に長く生ひ立ち行くことにして、相生なり。「相生の松」などの如し。

あひぎり（名）一節切のごとき物にて、竹の節と節との間を切りて造れるものを云ふ間切なり。

あひだちなし（形）別け隔てのなきことを云ふ。

あひなし（形）隔なしとの意なり。此の語音便にて「あいなし」と書くも

のあり。

あひわたる（自動）　互に逢ひつゝ年月を渡ること。

あふ（他動）　「ふるまひ」にして、種々に食物を取り合せて饗應すること。

あふさきるさ（名）　一方善ければ一方は、惡しなどの意に用ふ。徒然草に「親のいささめせのそしりをつゝむに、心のいとまなく、あふさきるさに思ひみだれ」とあるなど即ち是れなり。

あふじやう（名）　人を壓して、我が意のごとくに書かしむる文にして壓狀なり。

あぶす（他動）　殘す、棄てゝ又は餘すなどの意を含めり。

あぶり（名）　馬の下鞍の下より鐙の中に垂れて、馬の兩脚を覆ふ所の具なり。是は泥をはね飛ばして、衣服を汚すことを防ぐに用ふ。障泥と書く。

あふる（他動）　風に吹かれて動くこと。

あふる（他動）　吹き動かす、飜すなど。「風吹き來りて、戸のあふる」など。

あぶる（自動）　おちぶるること、即ち零落することなり。

あへ（名）　饗にて、飲食のもてなしをなすこと。

あく（自動）　急にいそがはしく呼吸をなすこと。

あへしらふ（他動）　挨拶すること。又はよく他の相手をなすことにも用ふ。

あへたちばな（名）　九年母の古名。

あまがは（名）　生絹にて造りしものにして、雨天に際して、雨を凌ぐがために用ふる具なり。

あまぎらす（自動）　「あまぎる」に同じ。

あまぎらふ（自動）　「あまぎる」に同じ。

あまざる（自動）　雲霧にて空の曇ることを云ふ。

あまざかる（枕）　鄙といふ語の枕詞なり。萬葉集に「天離」の文字を以て

當つ。

あまじし（名）　餘りの肉と云ふ意にて、人體に生ずる瘤疣などの如きもの。

あまつかぜ（名）　空吹く風のことにて、天津風と書く。

あまつかみ（名）　天にまします神といふことにて、天津神なり。

あまつくに（名）　日の神のまします所にして、天津國なり。

あまつそら（名）　天の空と云ふ。又禁中などを云ふにも用ひらる。

あまつひつぎ（名）　天皇の御位の尊稱にして天津日嗣なり。

あまつをとめ（名）　天女といふ意なり。又五節の舞を行ふ女をも云ふ。

あまなふ（自動）　交情を親密ならしむることなり。

あまねはす（他動）　周く行渡らしむることなり。

あまのはごろも（名）　天羽衣にして神の德服なり。又天皇の祭事に行はせらるゝに及びて浴沐のときに召し給ふ所の御衣の名なり。

あまびこ（名）　物の音響の四方にひゞきて答ふるものなり。

あまふ（他動）　我が罪を謝するがごときを云ふ。

あまをぶね（名）　漁獵する小舟を云ふ。即ち海小舟なり。又貝の名にもあり。

あみのりもの（名）　乘物の周圍に網を掛け張りたるものにして、古昔、重罪人を送るに用ひたるものなり。

あんぎや（名）　行脚の二字を當つ。宋音を以て讀む。禪家の語にして、遠く古郷を離れて天下を巡行し、道を求め、悟を證するなり。

あめつちのふくろ（名）　天地の袋と書く。初春にこれを縫ひて作る袋の名。是は天地を縫合するものにして、幸福を藏め置く所の祝物の意を偶したるものなり。

●あやか　●あよふ

あやかる（自動）　其の物に觸れて似ること、又他に感じて、姿の相同じくなることをも云ふ。

あやなし（名）「あや」は文なり、理なり、元理なきを云ふ。即ち理立たず、理の分らざることに用ふ。

あやに（奇）　奇妙に不思議に、と云ふ意なり。「あやに畏し」など。

あやぬの（名）　昔にありて、文のある布は倭文布のみなり。故にこれを稱して、文布といふ。

あやめ（名）　文目と書く、差別、條道などのこと。「あやめもわかぬ」など。

あゆぐ（自動）　搖ぐことなり。

あゆく（自動）　歩むことなり。

あゆひ（名）　脚に結ひまとふものなり。

あよぶ（自動）　歩むに同じ。

あらいみ（名）　神事にあづかる人々が、豫て物忌をなすことなり。

あらがね（枕）　土と云ふ語の枕詞なり。

あらきはり（名）　新に土地を開墾して斷地となし、草はかへして一年なるもの。

あらくまし（形）　荒き狀なり。

あらこ（名）　目の粗き籠を云ふ。

あらたまの（枕）　新間にて移り行くといふ意なり。年、月、日、春、夜などに掛けていふ枕詞なり。

あらはかす（他動）　「あらはす」といふに同じ。

あらひとがみ（名）　現世に在しまして、人の體なる神なり。現人神と書く。

あらます（他動）　豫め心に思ひはかることなり。

あららぎ（名）　草の名にして蘭の字を當つ。一名を「ぎやうじやにんに

●あちう　●あなひ

く」といふ。

あららぎ（名）　塔に同じ。

ありのひふき（名）　桔梗に同じ。

ありのまがひ（名）　物の數いと多くして亂れ紛ふことを云ふ。

あれ（名）　我といふ古語なり。

あをうなばら（名）　海面の蒼々と見ゆるよりして青海原と云ふ。

あをずり（名）　宣布を粉張にして、山藍を以て、鳥、草などの模樣をば刻版にて摺り出したるもの。即ち摺衣にして、神事、神樂などに用ふる一種の服裝なり。

あをによし（枕）　平城と云ふに掛くる枕詞にして、青丹吉の文字を充つ。

あをひとぐさ（名）　民と云ふに同じ。是は、人の此の世に生れ出づるは、恰も草の彌生に萠え出づるが如きものに譬へたる語なり。

（い）

い（名）　蜘蛛の巣、即ち蜘蛛の網絲を云ふ。

い（感）　呼び掛くる聲にして「よ」に同じ。

いうし（名）　猶子にして讀で字の如く、猶ほ子のごとしと云ふ。親族の子を已が子となすものを云ふ。義子にして、家督の養子と相異なれり。

いうろく（名）　有識の字を當つ。學者などの故實に明るき人を云ふ。

いか（名）　五十日なり。小兒生れて五十日目に祝を行ひ、餅を製す。これを五十日の祝と云ふ。

いか（名）　衣架なり。衣桁といふに同じ。

いかにかし（形）　猛く強くして荒々しきこと。即ち嚴しきこと。

いかう（副）　一向にといふに同じ。「ひたすら」のこと。

●い　●いかう

いかがはし（形）　如何にや、覺束なしといへる語なり。

いかき（名）　蜘蛛の網をかきたることを云ふ。

いかし（形）　醜なること。又重大なることにも用ふ。

いがたうあ（名）　伊賀專女と書く。狐の異名なり。「小がたらめ」の祭といへば、稲荷祭のことなり。是れ稲荷は、狐を神として祭れるに依るを云ふより起れり。

いかるが（名）　斑鳩の字を當つ。鳥の名にして「まめまはし」に同じ。

いきうす（自動）　行方の消えて無くなることなり。

いぎたなし（形）　目の覺むること難しとの意なり。眠を貪ることなり。

いきさる（自動）　分れ〳〵となりて、諸所に向ひ去ることなり。

いきづく（自動）　太く且つ長き息をなすことなり。

いきづむ（自動）　息の腹に張り詰むることを云ふ。

いきごはろし（形）　心に不平のあるありて、憂ふるところの狀態を云ふ。

いきほふ（自動）　氣の最も盛なることにして勢なり。

いきみたま（名）　生御魂の字を當つ。陰曆七月に於いて、生者を饗應する所の式の名。又盂蘭盆會に當り、子女よりして父母又は尊長を饗應することにも用ふ。

いくくむ（自動）　憤ることなり。

いぐし（名）　齋串の文字を當つ。幣などを掛くべき榊、小竹などを稱して云へる語なり。

いくはどころ（名）　射朶に同じ。其の條に見ゆ。

いくむ（他動）　互に射交すことにして射組なり

いけはぎ（名）　鳥獸などの皮を生ながらにして剝ぐことなり。

いけみぐさ（名）　蓮の異名なり。池見草の葉に露の珠の宿りなど。

いさ（副）　如何ならんか、如何にやの意なり。此の語を用ふるときは、必ず其の下に「知らず」と承くるものなり。「いさ、我れ知らず」など。

いざ（感）　心の望むとき、又は誘ふべきに發する語なり。此の語は、常に他の語の上に用ひらゝものにして、「いざ諸ともに」など。

いさかふ（自動）　言葉を以て論じ爭ふこと。即ち口論なり。

いさご（名）　砂子又砂に同じ。

いささ（接頭）　「いさゝか」、「わづか」などに同じ。

いささめに（副）　少時と云ふに同じ。「いさゝ待つ間にいつしか、日は暮れ果てぬ」など。

いさめ（名）　寐覺に同じ。

いさよひ（名）　「ためらふ」ことなり。

いざよひ（名）　陰暦十六日の稱、即ち既望。又十六日の夜の稱にも用ふ。

いさよふ（自動）　滯りて進み行かず、佇らふ狀なり。「いさよふ浪」又「いさよふ雲」など。

いさらゐ（名）　少しばかり水のある井戸なり。

いさりび（名）　「いさり」は漁のことなり。魚を捕ふるがために用ふる炬火を云ふ。

いし（形）　美しきこと、好ましきことに用ふ。又味の美なることにも用ひらる。又神妙或ひは巧なることなどにも用ひらる。

いしく（形）　「いし」と同じ。

いしなぎ（名）　魚の名にして「いしもち」と同じ。

いしま（名）　器にゆがみのあることを云ふ。歪の字を當つ。

いしむ（自動）　「ゆがむ」に同じ。

いろし（形）　能く勤むる所の狀を云ふ。

いうしむ（自動）　勤めて怠らざること、動勞なり。

いろね（名）　磯邊に宿りて寐ぬることなれば、磯寐の字を當つ。

いろのかみ（名）　石上と書く、大和の地名なり。山辺郡丹波市町東萬り石上神宮（官幣大社）のある所なり

いろめく（自動）　急ぐ狀なり。

いたいけ（名）　小兒の傷はしき狀なり。傷い氣なり。

いたいたし（形）　傷々しにて、甚だ傷はしきことなり。

いたがふ（他動）　抱きかゝえること。

いただきもちひ（名）　古着正月元日に於いて、小兒の頭に餅を戴かしめしことあり。是は祝ひのことなり。これを稱して戴き餅と云へり。

いたちはぜ（名）　藩木の名。連翹に同じ。

いたづらごと（名）　無益の言を云ふ。

いたのもち（名）　織物の名稱。織物を造るに、其の心に板を入れて疊みたると云ふ。

いたはじかみ（名）　山椒の古名。

いたぶ（自動）　甚だしく悲しむこと。又甚しくなる。又荒ぶるなどにも用ひらる。

いたやかた（名）　車の屋形にして、板の屋根を葺きたるものを云ふ。板屋形なり。

いたゐ（名）　板にて圍める井のこと。

いちくら（名）　市の商品を陳列する場所を云ふ。

いちじん（名）　天子を申し奉る所の語なり。

いちじろし（形）　著の字を當つ。其の意義相同じ。

いちのかみ（名）　左大臣の稱なり。左大臣は、太政官中に於ける事をば、總て一切の總理をなすものなれば、一の上とは云ふなり。

いちのきさき（名）　一の妃にして皇后に同じ。

いちつかさ（名）　東京司と書くものなれども、其の「東」の字は、捨てゝ讀さざるなり。昔、京都の市を司れる所の官人の稱なり。

いちのひと（名）　攝政關白の異稱にして一の人と書く。是れ攝關は、一座の上位に居るものなればなり。

いちのみこ（名）　第一に生れたまひし皇子を云ふ。

いちのみや（名）　「いちのみこ」に同じ。

いちやはし（形）　鋭きこと。烈しきこと。又急がしく早きこと。又心の鋭きことにも用ひらる。

いちひ（名）　木の名にして櫟なり。「いちひがし」即ち石櫧の字を用ふ。

いちめ（名）　女の商人を云ふ。又市に住む女のことにも用ひらる。

いちやぐさ（名）　景天草に同じ。

いちりづか（名）　諸國の街道に於いて、一里ごとに、道路の左右に相對して築ける所の塚なり。其の上には、多くは樹木、殊に松樹を植う。

いつ（名）　稜威の字を當つ。鋭き勢なり。

いつ（自動）　凍ることゝいてることなどに用ふ。

いつかし（形）　嚴しく且つ貴すこと。源氏物語に「今は天下を御心に掛け給へるおとゞにて、いかばかり、いつかしき御中に」云々。

いつきのみや（名）　齋宮にして伊勢の大神宮のことなり。又、伊勢、加茂の齋宮の居所をも、斯くは云ふなり。

いつきめ（名）　神に仕ふまつる女にして齋女の字を當つ。

いつく（自他動）　汚るゝことなき樣にして、謹み仕ふることなり。是は、專ら神に就きて云へるなり。

いつくし（形）　嚴なること、いかめしきこと。これを要するに嚴重なること

●いっく　●いっぱ

なり。

いっくし（形）美しきこと、麗しきこと、又愛すべきことにも用ひらる。

いっこんぞめ（名）一斤染と書く。紅花の大一斤を以て、一匹の絹を紅の色に淡きものに染むるを以て、斯くのごとくに云へるなり。

いっしか（副）「いつの間にやら」、「知らぬほどに」と云へること、又待つ意にも用ひらるゝことあり。「いつしかも、此の夜の明けなんと」云々など。

いっすもの（名）酒の肴となすべきものを一種づゝ打ち寄りて、種々に座興を催すことを云ふ。

いっせんぎり（名）漢字にては一銭切と書く。所持せる銭の有らん限りを没收せし一種の罰の名なり。

いっばかり（副）何時の頃にやあらんと云へる詞なり。

いっべ（名）祭事に用ふべき一種の陶器にして、嚴翁の文字を當つ。

いづもがな（名）出雲假名にして平假名のことなり。

いづち（名）「いづこ」又は「いづれ」と云ふに同じ。

いでゆ（名）出づる湯と云ふ義にして、温泉のことなり。

いとくらべ（名）琴などを弾きくらべて遊ぶこと。

いとげのくるま（名）牛車の屋形に搓りたる所の糸をば、簑のごとくに垂れしめたるものを云ふ。此の種のものは、院中宮内親王又は攝政、關白などに用ふる所のものなり。絲毛車の字を當つ。

いとどし（形）「いよ〳〵甚だし」と云へることなり。

いとなし（形）忙はしくして暇のなきことなり。又少しばかりと云へる場合にも用ひらる。

いとまし（形）競爭する狀なり。

●いっべ　●いとま

いとまぶみ（名）　疾病などのために、出仕すること能はざるを以て、暇を賜はらんことを請ふ所の文なり。

いとゆふ（名）　「かげろふ」に同じ。漢字の遊絲なり。これは轉倒したるものなんかと云ふ。

いなおほせどり（名）　古歌に云へる鳥の名にして、其の說種々ありて、一定せざるものの如し。或ひは雀なりといひ、或ひは鶺鴒なりといひ、又或ひは雁、山鳥、水雞などの類なりと云ふ。又或ひは馬なりとも云ふ。稻負鳥の文字を當つ。

いなぎ（名）　刈りたる稻を掛けて乾す所のものを云ふ。是は、竹又は木を立てゝ、これに稻を掛くるものなり。稻城。

いなぎ（名）　稻置の文字を當つ。たにありては邑長の號、降りて後世に至りては姓の名となれり。第八等の位に居るものとなる。

いなく（自動）　「い」とは、馬の鳴く聲なり。馬の嘶ぐ聲なり。

いなたま（名）　次項の「いなづま」に同じ。

いなづま（名）　稻の登熟する頃に及び、夜、空中に於いて閃く光を云ふ。又時候の如何に拘はらず、雷の鳴りはためくときに閃き光るをも云ふ。「いなびかり」とも云ふ。電の字を當つ。

いなつるび（名）　「いなづま」に同じ。

いなのめの（枕）　明くと云へる語の枕詞なり。然るに轉じて、直ちに明方のことにも用ひらる。

いぬたふもの（名）　漢字は犬追なり。射號の式の名なり。鎌倉時朝の時代より始まりしものにして、一町ばかりなる方形の馬場を造り、これに竹垣を遶らし、騎馬の武士は、直垂索袍などを着て、墓目の矢にて犬を追ひて以て、勝負を決する技なり。

いぬじもの（名）　犬の如きものなりとの意義なり。

いぬばこ（名）　「いぬはりこ」即ち犬張子に同じ。

いぬぼね（名）　宮門を守衛せる隼人が、犬聲とて、聲を發することを云ふ。

いはみなし（形）　あなどけなくして、子供らしきことなり。

いはどこ（名）　人を葬りたる場所のこと。又嚴る平なる場所をも云ふ。

いばはじか（名）　射場にて弓を射はじむる所の儀式を云ふ。

いはひべ（名）　齊斎の字を當つ。上古にありて、神酒を盛れる所の陶器の壺なり。「いむべ」と云ふは、即ちこれなり。

いはふ（地動）　神をば、謹みて祭ることにして、汚れを齋むことなり。

いはむ（自動）　滿つると云ふに同じ。

いひあり（名）　「あかあり」に同じ。

いひかひ（名）　飯を他の容器に移し盛るに用ふる具のこと。

いひみ（名）　飯を盛る器にして、曲物の蓋なきものなり。

いひしろふ（他動）　互に言ひ爭ふことにして、「いさかふ」なり。

いひすろ（他動）　物事を言ひ過すことなり。

いひば（名）　飯粒に同じ。

いへついも（名）　里芋のこと。

いへつどり（名）　雞のことなり。

いへのいも（名）　里芋に同じ。

いへばえに（句）　言へば言ひ得ずと云ふ意。「いへばえに言はねば苦し」など。

いみき（名）　姓の名、第四等に位す。忌寸の文字を當つ。

いみことば（名）　忌詞にして忌みて語らざる一種の詞なり。婚禮の席に於いて猿「さめを」などの詞を忌む類。

いみじ（形）甚だ勝れたゝこと。「いみじき贈物どもを捧げまいるにな
ん」など。

いむ（自動）物事を苟も猥りになさずして謹むこと。

いむかふ（自動）向ふとなり。其の「い」は發語なり。

いんけん（名）脇差のことなり。脇差は元人に見せしめずして、これを鎌
して差したるものなればなり。隱劍。

いむべ（名）祭器を製し、且つ祭事にあづかることをなす職名なり。

いも（名）妹の字を當つ。男より女を親しみ呼ぶ所の名稱なり。

いもし（名）芋莖に同じ。

いもじ（名）鑄物師に同じ。

いやたひ（名）春時に至りて、草の彌が上に萠え出づること。陰曆にては
三月の名稱とす。

いやむ（他動）彌が上に忌み嫌ふこと。

いよやかに（副）高く聳えて、いやがうへにも高しと云ふこと。

いよよ（副）いよ〳〵の約にして、いよ〳〵ます〳〵など。

いらいらし（形）心のいらつことの甚ざしきものなり。

いらか（名）屋上に葺きたる瓦のこと。鱗のごとく見れば、これより轉じ
たるものなり。

いらつこ（名）郎子の字を當つ。古にありて、男子をいつくしみ親みて呼
べる語なり女には「いらつめ」と云ふ。

いれかたびら（名）襟紗のごときものにして、衣服を藏め置くとき、これ
を包むに用ふるものなり。

いろ（名）家の古語なり。「いろ母」「いろ兄」など。

いろごろも（名）色のいと麗しき衣服を云ふ。

いろも（名）　家の妹と云ふ義なり。

いをすき（名）　草の名、「やまごぼう」（商陸）に相同じ。

（う）

う（形）　憂しといふに同じ。「あな、うしの世や」など。

うかのみたま（名）　宇迦の御魂なり。食物の神にして、殊に稻の神を指して云へるなり。

うがぶ（自動）　「うがひ」をなす。即ち口を嗽ぐなり。

うかみ（名）　窺ひ見るの意なり。

うかれいで（名）　土着にあらざる人にして、浮浪人を云ふ。

うきうき（副）　心の浮るゝ狀を云ふ。

うきみ（名）　憂に沈める身の上と云ふことなり。

うくは（名）　酒盃の古名なり。

うぐひすのさるがき（名）　草の名にして「さるとりいばら」に同じ。

うけ（名）　食すべき物にして、これを約して「け」即ち食の字を用ふ。

うけそう（名）　請奏する意にして、請ひ受けんことの奏聞なり。

うけばる（他動）　引き請けて、專にすること。確く保證することなり。

うけむけ（名）　僕字にては、有卦無卦、又有氣無氣、或ひは有慶無慶などの文字を充つ。陰陽家に於いて、五行の相生相剋の理より、これを干支に配り附けて、其の人の遇ふ年に就いて、吉凶を云ふことなり。有卦に入るときは、七年の間吉事多く、無卦に入れば、五年の間凶事の續くものなりとか云へり。

うけら（名）　草の名にして「をけら」に同じ。其の條を見よ。

うこなはる（自動）　「まゐりあつまる」にて參集の字を充つ。

うごもつ（自動）　墳にして土の高く起る所なり。

うごもる（自動）　「うごもつ」に同じ。

うさゆづる（名）　掛け替への弓弦なり。「うさ」は藏めの轉ならんかと云ふ。

うし（形）　思ふまゝにならずして、心の苦しきこと。即ち憂しなり。

うしねふもの（名）　牛追物にして、犬追物の類なりと云へり。

うしざき（名）　昔時ありし刑罰の名にして、両方両足をば、各々四頭の手の體に繋ぎ附け、其の背に柴を負はせ、これに油を濺ぎて火を點ずるときは、四頭の手は、各猛り狂ひて駈くるを以て、人體を四裂するに至る。

うしはく（名）　其の土地を領有する意なり。古事記に「汝がうしはげる葦原の中つ國な」とあり。「うし」は主のことなるべし。

うしろべたし（形）　「うしろめたし」に同じ。

うしろめたし（形）　後の事の心に掛るなどのこと。又見えぬ所心もとなしなどにも用ひらる。

うず（名）　馬具の一種にして、唐鞍の鞦の打交ふ所に附くる飾り物の名なり。

うすびたひ（名）　冠の一種にして、磯の低きものなり。

うすらひ（名）　薄氷にて、氷の薄く張りたるものを云ふ。

うすゑむ（自動）　「ほゝゑむ」に同じ。微笑の字を當つ。

うたうら（名）　和歌にて吉凶を占ひ見ることにして、歌占なり。

うたかた（名）　水上に浮ぶ泡なり。多くは「はかなきこと」に譬へて云へり。

うたかた（副）　暫しの間も、と云ふ意なり。「うたかた花をありと見ましふ」などあり。

うたぐ（自動）　安らかに坐すること。又腰を掛くることにも用ひらる。

うだく（自動）　吼ゆるといふに同じ。

うだく（他動）　懷くに同じ。

うたげ（名）　酒宴のこと。「親しき友の集りて、うたけして」など。

うだち（名）　梁の上に建つる所の短き柱を云ふ。

うたて（副）　舊來有事柄のいよ〳〵進み行きて殊に甚だしく成り行く意に用ふる語なり。又平穩ならず、尋常ならずして、其の事の怪しく且つ良からぬ意にも用いらるゝことあり。

うたてし（形）　甚だしと云ふ意にて、多くは良からぬ意に用ひらぬ。

うたなし（形）　疑ひなしとの意なり。

うたふ（他動）　訴ふるに同じ

うたを（名）　歌をうたふに巧なる男。歌男なり。

うちあはせ（名）　「ふとも〻」に同じ。

うちあり（自動）　尋常のことゝ云ふ意なり。打有の字を用ふ。

うちがたな（名）　一に「つばがたな」とも云ふ。鍔の附きたる尋常の刀なり。

うちぎき（名）　聞くこと。聞きたること又聞きて後、記し置きたる歌にも用ふ。又或ひは聞書にも用ひらる。

うちぎぬ（名）　婦人の着る單衣のことなり。建武年中行事に紅のうちぎぬしとあるもの是れなり。

うちたれがみ（名）　古、婦人は髪を結ふに、結ひ上ぐることなくして垂れてありしを云ふ。

うちでのたち（名）　用意のたかに取り出し置く太刀のこと。

うちね（名）　箭の太くして短きものを云ふ。恰も敵に向つて抛つ所の手

●うちの　●うちみ

裏劍のごときものなり。

うちのおとど（名）　内大臣に同じ。

うぢのかみ（名）　氏上の字を當つ。一家宗族の中に於いて、其の氏族の長として諸事を司らしむるものゝ稱號なり。

うちひさす（枕）　宮又は都の詞に掛けて用ふる所の枕詞なり。內日刺と書く。

うちまき　名）　打ち撒きて、神を祀る所の米を云ふ。又米俵のことにも用ひらる。或ひは米の異名にも用ふ。

うちまつ（名）　松明に同じ。篝火に松の木の割りたるものを打ち入れて焚く意より起りし語なりと云ふ。

うちみみだりのはこ（名）　手巾などを納め置く所の箱の名なり。舊は、手箱のかけごを用ひたりしに、後に至りては、特に其の箱を作るに至れり

と云ふ。後には、櫛雜具を入るゝものとなれり。

うちむろづくり（名）　家を建築するに屋根裏を露はしたるのみにて、天井を張らぬものなり。足は古の遺制にして、神社又は佛閣の金堂などに此の建築法を見る。昔の紫宸殿、清涼殿なども此の制を取れるなり。

うつ（名）　高傑にして嚴しき意をて、物を褒むる語なり。「うつの御子」などの類なり。

うつあし（名）　「ひかゞみ」に同じ。

うづき（名）　卯月なり。卯の花月の略にして、陰暦四月の稱なり。

うづきのはな（名）　卯月の花にして卯の花のこと。

うづきはな（名）　卯月花にして石南花に同じ。

うつくし（形）　愛する意なり。

うつくしむ（他動）「いつくしむ」に同じ。

●うちむ　●うつく

うつけ（名）　空くることなり。又心の茫然とすることにも用ひらる。

うしろところ（名）　顯しき心と云ふ意にして、萬葉集には現心の文字を用ひたりうつせみのうつし心一なぞ。

うつせみ　（名）　名せに現在してあどの身のことなり。空蟬の文字は、假借し來りたるものにして、現身又顯身の文字を用ふ。

うつせみの（枕）　世、人、命などに掛けて用ふる枕詞なり。前項の「うつせみ」の語を轉じて用ひしものなり。

うつたへに（副）　「ひたすらに」、「ひとへになど」云ふ意。

うつつ（他動）　打ち棄つ、と言へる語の約なり。

うつばぐさ（名）　葱の異名葱は、内部の空なる故に、かくは名づけしなり。

うつばばしら（名）　一名箱樋とも云ふ。家の各所に立てたる内部の空なる柱のごときものにして、屋根の横樋の雨水を受けて、流すものなり。

うつばぶね（名）　丸木を刳り抜きて作れる舟にして、空舟なり。

うつむろ（名）　戸を備へざる家にして、無戸室なり。

うつらうつら（副）　「つくづく」、又『つらつら』に同じ。又續々睡眠を催す狀にも用ひらる。「うとうと」なぞに同じ。

うつろ（名）　内部に空しくなること、又内に物なくして空虛なることにも用ふ。

うつろはす（他動）　うつろふ如くにすること、變らず。

うつろふ（自動）　「うつる」の延びたる語なり。又影の映ることにも用ふ、或ひは色の變る。又は心の變るにも用ふ。

うづる（名）　蹲まり居ること。

うづゑ（名）　卯杖なり。正月上の卯の日に當り、兵衛府より奉れる杖なり。此の杖は桃、梅、椿、柳などの類にて造り、五色の糸にて捲きたるものなり。

漢土の故事より起りしことにして、邪氣を拂ふがためなりと云ふ。

うてのつかひ（名）　追討使にして討手のために差向けらるゝ使なり。

うどねり（名）　内舎人にして中務省に屬する所の一種の職なり。右にありては、公卿の子弟以て之れに補し以て、禁内殿上の事に習熟せしむることゝなせり、後世に至りては、源平などの内より適宜之れに補するに至れり。帶劒侍衛を以て其の職とす。

うどぶ（他動）　疎むに同じ。

うどまし（形）　親しまざることを云ふ。

うどむ（他動）　親します。又「おろそか」にするなど。又親しむことを好まずして忌み嫌ふことにも用ひらる。

うな（接頭）　頂の意にて「うなだれて聞き居たり」など。

うながする（自動）　頂に手を掛けて、互に親しみ合ふこと。

うながみ（名）　頂髮の意にして「たてがみ」に同じ。

うなじ（名）　頸の背卸にして、襟頸のことなり。

うなばら（名）　海洋の渺茫たる廣きについて、斯くの如く云ふなり。

うなや（名）　牢室のこと。

うなゐ（名）　髫髮の文字を當つ。頭髮の頸に垂れたるを云ふ。

うなゐこ（名）　「うなゐ」は頭髮を結ひたる狀を云ふ。轉じて單に童を云ふにも用ひらる。

うねめ（名）　昔、後宮に於いて、御膳の事に與るものにして郡の少領以上のものゝ姉、妹、又は娘の容姿端麗にして温雅なるものゝ内より撰拔せらるゝなり。又「うねべ」とも云ふ。

うはがひ（名）　衣服の衽のこと。

うばそく（名）　梵語にして優婆塞の文字を充つ。俗界に在りて佛門に入

●うばた　●うひた

れる所の男子の稱なり。信士男又は近事男と云ふ。佛に近事するを以て
なり。又女なるを優婆夷大は信士女或ひ近事女とも云ふ。

うばたまの（枕）　烏羽玉と書く。「ぬばたまの」の條下に詳記す。

うはなみ（名）　水面に立つ所の波にして、上波なり。

うはなり（名）　後妻のこと。繼妻なり。

うはみ（名）　袴の上に着るものにして、裳のごときものを云ふ。

うはらぐつわ（名）　唐鞍に用ふる所の轡の名なり。疾藜銜の字を用ふ。

うはを（名）　後の夫なり。即ち再度よりの夫を云ふ。

うひ〻ひし（形）　物馴れざる狀にして、何事にも始めてらしきを云ふ。

うひだつ（自動）　立ちはじむることと。「霞のうすく峰の端にうひだつ」など。

うびたひのうま（名）　更額の馬か。「つきしろ」に同じ。

うぶすな（名）　生れたる土地のこと。即ち産地なり。又「うぶすなのかみ」の略にも用ひらる。

うぶめ（名）　孃姙せる婦人のことなり。或ひは産歸にも用ひらる。

うぶや（名）　産室のことなり。子を産むとき、豫め別に一室を建てたるものなり。

うまびど（名）　位と德望の高き人にして君子紳のごとき是れなり。

うまぶき（名）　牛蒡の古名なり。

うまやぢ（名）　驛路にして驛なる道のこと。即ち東海道五十三驛の如き是れなり。

うみがつき（名）　臨月にして産むべき月のこと。

うみのたきな（名）　海の翁にして海老の異名なり。

うめはつづき（名）　陰曆十二月の異名にして梅初月なり。

●うふす　●うめは

うめみづき（名）　陰暦二月の異名にして、梅見月なり。

うやなし（形）　「ねやなし」に同じ。無禮のことなり。

うらがす（他動）　絲ましむること。

うらかた（名）　占形なく。占ひて現れし象の如何を云ふ。

うらぐ（他動）　樂しむ。又面白くなるなどのこと。

うらこひし（形）　心戀ひしきこと。

うらさだめ（名）　物事を占ひて定むること即ち卜定なり。

うらやすのくに（名）　日本國の異稱。

うららかに（副）　空の晴れ渡りて、長閑なること。

うららに（副）　前項に同じ。

うりしろなす（他動）　賣り揚げて代金となすこと。

うるせし（形）　麗しとも、又善しとも解するものなり。

うるひ（名）　潤ふこと。

うるしね（名）　粳にして普通の米なり。

うろ（名）　佛經の語にして、世俗の凡夫を稱すること有漏の字を當つ。

（え）

え（名）　兄のことなり。大兄・兄媛などの如し。

えい（名）　漢字の纓なり。冠に附きし一の具なり。元は巾子の根を締めたる紐の餘りの部分の背部に垂れしものを云ひしが、後には、別に羅にて作り、二條となるに至れり。天子の纓は、上に向ふものにして、これを立纓と云ひ。諸臣の纓は、下に垂れたるものなり。之を纓と云ふ。又武官の用ふるものは、内にて卷く、之を卷纓と種す。

えいきすく（名）　今樣風の「うたひもの」の名なり。

●えかは　●えみや

えがばら（名）　小兒の腹痛の疾病の名なり。

えこ（名）　長子にして兄子の義なり。即ち長男を云ふ。

えだつ（自動）　役に立つこと夫役に當りて出づること。

えに（名）　縁にして「ゆかり」なり。

えにし（名）「えに」と同じ。天爾遠波の「し」とともに云ひし語にして、「住のえの江にしなりける神につかへて」などあり。

えびぞや（名）　葡萄色染のこと。

えんがる（自動）　艶なる風をなすこと。

えんぞ（名）　艶書に同じ。

えもぎ（名）　草の名、「よもぎ」に同じ。

えみや（名）　熱病などの如き流行病の稱なり。又疫病と解するも可。又瘧の稱にもあるなり。

えぼよろ（名）　役に立つ丁にして、課役の人夫なり。

（お）

おいかけ（名）　武官の冠の兩耳の上に着くる所の飾り物を云ふ。是は、其の形、菊花を半切になしたるが如きものにして、毛にて作れるものなり。

おいがる（自動）　老いて音聲の嗄るゝことなり。

おいさぶ（自動）　追ひすさぶこと。

おいほく（自動）　老ひぼけて、物事を覺えぬ狀なり。

おいほる（自動）　前項に同じ。

おいほれ（自動）　前項に同じ。

おいらかに（副）　「おとなしき」こと、「じんじやうなる」こと。

おうな（名）　老いたる女のこと。

●えぼよ　●おうな

おうなし（形）　思慮の淺薄なることを云ふ。

おうよる（自動）　奥の方へ寄ると云ふ意味なり。

おきつ（他動）　捉さだむること。

おきつしまね（名）　沖津島根にして、海の沖に在る島なり。

おきつしまもり（名）　沖の島の守り人のこと。

おきつしらなみ（名）　沖津白浪にして、沖に立つ白き波浪のこと。

おきつなみ（名）　沖にて立つ波のこと。

おきな（名）　翁にして年老いたる人を尊敬して云ふ語なり。

おきなぶ（自動）　翁の狀なり。

おきぬふ（動）　「おきなふ」に同じ。

おぎのる（他動）　掛にて物を買ふこと賒の字を當つ。

おぎやう（名）　五行と云へる草の名にして、「はゝてぐさ」をば、正月七日、

七草に用ふるときの名なり。

おぎろなし（形）　廣大無量なりとの意。

おくか（形）　奥まりたる場所のこと。

おくつき（名）　墓の古書なり。

おくどこ（名）　奥の方に在る臥床にして奥床なり。

おくりな（名）　人の死亡したる後、其の人の行狀などに就きて、適當に命じたる名なり。漢字の諡に當る。

おしたし（感）　「おし」を重ねて言ふことにして、警蹕の聲なり。

おしがみ（名）　附紙とも云ふ。文書などに別に紙を貼り附けて、之れに趣意を記載し置くこと。

おしてる（枕）　難波の枕詞にして、襲ひたてる約にて、波に就きて云へる所の語なりと云ふ。

おすめどり（名）　護田鳥の文字を當つ。鶯なるべしと云ふ。又「おすべどり」、「うすめ」、「うすべ」なるべしとも云ふ。

おする（名）　後宮に於いて、婢女などの居る場所の名。

おゞ（名）　鈍きこと。

おゞし（形）　心の鈍きこと。

おゞまし（形）　悍しと相同じ。

おだし（形）　「おだやかなる」ことなり。

おとかみ（名）　脱き落ちたる所の鵐髪を云ふ。

おとなし（形）　怖るゝこと特に甚だしきの意なり。

おとく（自動）　心に「とりしまり」の無きことを云ふ。

おとしむ（他動）　劣れるものとして見下げ果つること。

おとど（名）　高貴の人の邸宅にして大殿のこと。

おとね（名）　正月の下の子の日。

おたりばら（名）　妾の生みたる子。

おどろおどろし（形）　驚くべきこと。

おにおにし（形）　夜叉のごとく荒くして怖るべきこと。

おにのしこぐさ（名）　紫苑と云へる草の別名ならんと云ふ。

おのがしし（副）　人々が、心心にすること。「おのがしし東に西に南に、さては北に向ふもありけり」など。

おのもおのも（副）　各に同じ。

おばしま（名）　欄干に同じ。

おひずり（名）　背に負ふ籠のこと。俗に「おいずる」と云ふは誤れり。籠とは、竹にて臨みたる籃のごときものにて、旅の用に供するものなり。

おひずり（名）　笈摺と書けども、負籠の借字なり。巡禮者の背に着る服の

こと。杉山某の著に成れる「國文故事熟語詳解」と題するもの丶中に「巡禮者の服の前に掛くるもの」とあれども、是は誤れること言ふまでもなし。

おびと（名）　上古に於ける姓の名なりしが、後、連に入れり。大人の約にして、首の文字を當つ。

おふす（他動）　「おはす」に同じ。

おふなおふな（副）　隨分と云ふ意なり。

おはいおはとものひ（名）　右大辨又は左大辨の古稱。

おはいきみ（名）　大君の義なり。

おはいしるすつかさ（名）　太外記の古稱なり。

おはねびかづら（名）　葡萄の古名。

おぼおぼし（形）　物事の「はつきりせぬ」ことなり。漢字の朦朧に當る。

おはみなし（形）　愚なる意にて、俗に所謂「をとなげなき」ことなり。

おはす（他動）　生す。延ばすこと。又、育つる。成長せしむるなどのことにも用う。

おはす（他動）　遂ぐ果すなどの意に用ひらる。

おはどかに（副）　寛に穏に言ふ所の語なり。

おはどく（自動）　取締らざる心などのことに用ふ。

おはとなぶら（名）　大殿油の約にして、燈火の燈の稱なり。

おはどる（自動）　亂れ乱るること。

おはねむし（名）　稲虫に同じ。

おはびる（名）　「にんにく」に同じ。

おはみあへ（名）　群臣に宴を賜ること。

おほめかし（形）　分明ならざることにて、漢字の朦朧に當る。

おはやけばら（名）　包み隠さゞる怒ののことを云ふ。

●おほら　●おもひ

おほらかに（副）　澤山に、と云ふ意。

おんぞ（名）　天子の神事に用ひ給ふ御服のこと。

おんもの（名）　禮服を着たるとき乳の下ふり垂るゝものにして、綬にて珠を貫けるものなり。天子は、白玉にて二旒、臣下は一旒、公卿は、玄玉を用ふることゝなれり。

おもがくし（名）　耻づしさに堪へずして、正面に讀を向くること能はざるが如きを云ふ。

おもてがた（名）　假面のこと。

おもなし（形）　他に向ふべき面なしといへることにて、はぢかしき意なり。

おもひぐさ（形）　思ひの種を草に寄せて云ふ詞なり。

おもひぐまなし（形）　心にこれと掛けぬ樣子なり。

おもひね（名）　人を思ひつゝ寢ることなり。

おもひのいろ（名）　紅の色なり。

おもぶせ（名）　耻づかしく思ふこと。

おもへり（名）　顏色なり。

おもほてり（名）　顏色に憤怒の色をあらはすこと。

おもむろに（副）　徐の字を當つ。「しづかに」「そろ〳〵」などの義なり。

おももち（名）　「かほつき」といふに同じ。顏色なり。

おもわすれ（名）　人の容貌を見忘るゝこと。

およずく（自動）　人々の生立つに從ひて、漸次まさりて智惠の附くこと。

およづれ（名）　漢字の妖言に當る。「まどはしごと」なり。

おらぶ（自動）　叫といふに同じ。

おりゐのみかど（名）　位を降りたまへる天皇のこと。

●おもひ　●おりゐ

おろおろ（副）物事の物を送らずして届きかねるが如きことを云ふ。又泣きて其の言葉のうるむ話のときにも用ひたる。

おろかに（副）「おろそかに」に同じ。

おろろかに（副）「ゆるかせに」「かろ〳〵しく」などに同じ。物事を粗略にすること。

（か、が）

かいがね（名）俗に所謂「かいがらぼね」にて、人體の背の肩の下なる兩傍に小高く成れる骨なり。

かいげん（名）佛家に於いて、佛像の落成したるとき、執行する所の式典なり。

かいぞへ（名）助けて事を成す人を云ふ。又女を娶るときに添ふる所の婢をも云へり。

かいなづ（他動）無づると云ふに同じ。

かいのし（名）僧となるべき人に向ひて、戒を授くる師僧のこと。

かいひろむ（他動）身を潜めて差出でがましきことをなさぬを云ふ。

かいまみ（名）覗き見ること。伊勢物語に「かいばみして」とあり。「ばみ」は、「まみ」に同じ。

かいもちひ（名）飯にて製したる餅のことなり。

かいもと（名）「かきもと」の音便にして垣下の字を當つ。褄隱のとき、主人を助けて取持をなす人のこと。

かうあばせ（名）種々の香料を焚きて、其の匂を嗅ぎ、これが香の如何なるものなりやを言ひ當つる技にして、延喜、天暦の頃より始まりしなり之に用ふる香料は、すべて七種ありて、採蘇羅、羅國、眞中、眞名盤、蘇馬答、刺

及び伽羅の六種なりと雖も、伽羅は、これを新古に分つものなれば、都て七種となる。

かうい（名）　更衣にして「ころもがへ」のことなり。又仁明天皇の御世より立てられし更衣と云へる後宮女官の稱なり。是は、女御に次ぎて、御衣を更へ奉ることを務むる職なり。

かうがうし（形）　神々しの音便にして、如何にも神さびたることなり。

がうざんぜ（名）　降三世の字を當つ。佛經に云ふ、明王の一にして東方を護り司るなり、三面八臂を備ふ。

かうじ（名）　人の罪なるとき、法に從ひて、其の刑を勘へ當つること、勘事の音便なり。俗に所謂勘當なるものは、此の語より轉じたるものなり。

かうぢやう（名）　漢字にては定考と書く。倒に讀むを通例とす。是は、上皇の音と相通ずるが故に、其の嫌を避けんがために、斯くは倒讀するなりと云ふ。諸司の人々の藝能、行狀、勤惰のごときを査察して、其良能を撰びなすことを云ふ。

かうぬし（名）　神主のこと。

かうばさみ（名）　髮鋏の音便なり。

かうぶん（名）　天皇より神祇に告げさせ給ふ所の文なり。漢字にては告文の字を當つ。

かうぶり（名）　冠に同じ。

かうやう（名）　斯樣の音便にして斯の樣と云ふこと。

かがげのはこ（名）　頭髮の具を入るゝ一種の箱なり。

かがづらふ（自動）　事にかゝり合ふこと。

かがなく（自動）　聲を枯らして怒り鳴くこと。

かがなべる（副）　日を重ねて、と云ふ意義なり。

かかは（名）　絹布の破れて廢物となりしものにして、絹の襤褸を云ふ。

かかはわらうつ（名）　「かかは」を加へて編みつくれる草鞋なり。

かがみご（名）　酸醬の子なり。

かがよふ（自動）　「ひらめく」、「かゞやく」と云ふに同じ。

かかりうど（名）　掛人の音便にして、他人に賴りて扶養を受くる事のこと。

かがる（自動）　「かゞやく」に同じ。

かきくる（自動）　暮るゝと云ふに同じ。

かきたる（自動）　雨、雪の空の打ち曇ることを云ふ。

かきなす（他動）　搔き鳴らすこと。「月に向ひて琴をかきなす」など。

かきは（名）　「ときはかきは」の條に詳記す。

かきぼ（名）　書と云ふに同じ。

かきみだる（自動）　亂るると云ふに同じ。

かくごん（名）　漢字の格勤なり。怠らずして勉むること。

かくしきしやう（名）　入札と云ふに同じ。隱起誓と書く。

かくしやう（名）　學問する少年のこと。

かくのあわ（名）　香果の泡の意なり。「からくだむの丶油」を云ふなりと。

かくのみ（名）　橘の實の古名なり。

かぐはし（形）　香ばしきこと。

かくびやう（名）　脚氣に同じ。

かくふ（他動）　「かこふ」に同じ。即ち圍ふなり。

かぐらづき（名）　陰曆十一月の異名。

かくれぬ（名）　物かげになりたる沼のことなり。

かくれみの（名）　身を隱すがために着る所の簑なりと云ふ。

●かくろ　●かけま

かくろふ（自動）　隠るゝことの延びたる語なり。

かくおび（名）　唐衣と同一の地質にて、繃なるものなり。古の婦女の裝飾にして裏に着く。

かけかけし（形）　多くは男女の事に用ふる話にして、心に掛くを狀なり。

かけぢたら（名）　稻の登りしものをば穂のまゝにて青竹に掛けて、これを神に奉ることを云ふ。

かげとも（名）　山の陽のこと。

かげなびくはし（名）　内大臣の異稱。是れ三公を三台星に比し、内大臣が之に宣げば、斯くのごとく云ふものなり。

かけひ（名）　掛樋なり。水上高く掛け渡して、氣を通ずる樋を云ふ。

かけまくも（副）　「かけまくも、かしこし」と云ふは、言の葉に掛けて言はんも、恐多しとのことなり。祝辭の詞にして、和歌にも、神祇にも、これを用

ふ。

かげろひ（名）　「かげろふ」に同じ。

かげろふ（名）　「かげろひ」の轉にして、陽炎の文字を當つ。春の長閑なる日に當りて、空中にちら〳〵と立昇りて見ゆる氣を云ふ。又閃き飛ぶことと陽炎のごとしとて、古には、蜻蛉の異名にも用ひらる。又蟲の名にもあり。又蜉蝣の一稱なり。又貝の名にもあり。

かご（名）　鉸貝の漢字を用ふ。革帶の一端に銅にて造りし鉤ありて、約むる用に供するものなり。即ち帶鉤を云ふ。又鐙の頭なる鐵環の中の「びぢよがね」をも云ふなり。

かこかに（副）　打ちにもりて。又四方を打ちかこみて、などのこと。

かこつ（他動）　或る事にかこつけて言ふ談なり。轉じて佗言にも用ひらる。又悲嘆にも用ふ。後撰集に「夏の夜の月はほどなく明けぬれば朝のま

●かけろ　●かこつ

をかかとちよせつる」と。

かこと（名）　託言にして、言にかこつけて云ふなり。

かこやかに（副）　打ちかこまれてある狀と云ふ語なり。

かざがくれ（名）　風に當らざる樣にして、物陰に隱るゝことを云ふ。

かささぎのはし（名）　七夕に當りて、牽牛と、織女と、天の河に於いて、互に相會するとき鵲が、其の翼を張りて、渡すと云へる想像の說より、斯くは云ひしなり。又禁中を天の上にあるものと見て、其の御階を稱する語にも用ひらる。

かざながれ（名）　鷹飼の語にして、鷹狩をなすに、際して、鷹が、風に吹かれてそれ行くことに用ふるなり。

かざみぐさ（名）　柳の異名。

かさやどり（名）　笠宿りなり。驟雨などに逢ひて、檐下又は樹下に雨を避

けて宿ることなり。

かざりぐし（名）　冠に着くる所の飾り物を云ふ。

かしかまし（形）　喧しきことにて、騷々しきことなり。

かしきがて（名）　雜炊のごときものなりといふ。

かしこむ（自動）　恐れ多しと見ることと、又畏しと思ふ。

かしはで（名）　柏手の義にして、古、葉椀、葉盤などゝて、柏の葉を以て、食箭となしたるに起るものなり。即ち飲食の纓膳とす。又膳夫とて、膳のことを掌る人のことにも用ひらる。

かしはばさみ（名）　內裏燒亡などの凶事のときに用ふる所の冠にして白木にて造れるものなりと云ふ。柏夾の文字を用ふ。

かしよね（名）　精米を清く水にて洗ひ、これを神に供するもの。一に洗米とも云ふ。

かすみぞめづき（名）　霞初月にして陰暦正月の異稱なり。

かたうど（名）　相對するところの一方人を云ふ。方人なり。

かたぎぬ（名）　古武家に用いし禮服なり。衣の上に着るものにして、肩より背のみを被ひ、前は、唯襟のみにして袖なきものなり。下に半袴を着くるものにして、其の上下ともに、染色に相同じきものなりとす。これを稱して社作と云ふ。

かたこひ（名）　我れを慕ひ戀はぬ人を戀ひ慕ふこと。片戀なり。

かたしく（他動）　衣の片袖を敷くこと。

かたじけなむ（自動）　恐れ多く思ふこと。辱しと思ふこと。

かたたがひ（名）　何物に拘はらず、長の或ひは高く、或は低くして、揃はざることを云ふ。

かたたがへ（名）　方角を忌むことなり。陰陽家に他出の方角に就いて、吉凶を云ふ又。此の場合に於いては、天一神の在す方を避くるといふこと。若し其の行かんとする所の方角の凶なるときは、前夜の内に、他の妨げなき方角に至りて宿泊し、更にこれなり其の目的の方へ、方角を違へなどして行くことなり。

かためぶみ（名）　誓を固むるがための文なり。證文のこと。

かづく（他動）　游ぐ。水を潛る。「もぐる」などのことなり。

かつらをとこ（名）　月の中に棲めりと傳へらるゝ人なり。

かつらをぎ（名）　神社又は宮殿の棟木の上にありて、數個相並べて附くる所の木なり。其の形圓く且つ長くして、中ほどは豐に、恰も鰹節のごとき形狀をなしたるものなり。

かてに（接尾）　爲し難き情のこと。動詞につきて副詞とす。

かどかどし（形）　心の利きたること。即ち恰悧にして、物事にぬからぬを。

云ふ。

かどのをさ（昔）　昔、檢非違使の下に屬せる官職にして、主として逮捕の事を司るものを云ふ。

かどび（名）　葬を送るときに於いて、門にて焚く火のこと。

かとり（名）　最も緻密に織り成せる所の絹布の名なり。

かながき（名）　織製の農具にして、草を掻き取るもの。熊手の類なり。鉄の漢字を用ふ。

がに（接尾）　動詞につきて、副詞とする所の接尾語なり、「何々のやうに」又「何々ばかりに」などの意をあらはす。

かにかくに（接）　「とにかくに」と云ふに其の意義を同じうす。

かね（接尾）　「がね」に同じ。又「豫て」といふ意に用ふ。此の場合に於いては、名詞につく接尾語。

かねごと（名）　豫て言ひ置ける言葉と云ふこと。

かはおろし（名）　川風に同じ。

かはぎぬ（名）　皮衣に同じ。

かはたけ（名）　若竹に同じ。是れ此の竹は、常に皮あるものなれば、皮竹の意なるべしと云ふ。一は河竹とも書く。

かはたれとき（名）　誰彼の見別けのつかぬ暮方又は曉方を云ふ。「あつきのかはたれどきにしまかげを漕ぎにし舟のゆくへしらずも」など。

かばね（名）　姓なり。上古の臣、連、伴造、國造などの稱を云ふ。又死骸にも用ふ。即ち尸なり。

かはびらこ（名）　蝶の古名。

かはや（名）　川邊に在る家のこと。即ち川屋なり。

かひあはせ（名）　婦女の遊戯なり。三百六十箇の蛤貝を分ちて、一片の殼

●かひた　●かひや

を稱して地貝と云ひ、悉くこれを場に並ぶべし。而して其の中央に空所を設け、一片の殼を出貝と云ひ、一箇づゝを出して、前の中央なる空所に置くべし。それより座の人には、其の地貝と出貝とを拾ひて、相ちゃさきものを認めて之れを合すものとて、其の合せ得たるものを爲きものを以て賢者となす。

かひたひし（形）　勇み勵む狀を云ふ。

かひだるし（形）　「かひだゆし」に同じ。腕のだるきことなり。古歌に「夜もすがら物おもふときの面杖は、かひだるきこと、知られざりけれ」などあり。

かびや（形）　山村などに於いて、鹿猪などのごとき山獸を見は人がめに假座にて蚊火を焚くを云ふ。又田を守る人が蚊遣にくゆらす火をも、斯く云ふなり。

かふご（名）　善く間に合ふことなり。台期の文字を當つ。

かぶらや（名）　其の形、蕪の根に似たる一種の鏃なり。木にて圓く、且つ長く膨らかて作り、其の内部を空虛にして、之に三つの孔を穿ち、雁股を添へて用ふるものなり。故に之を射るときは風を通ずることゝなりて、鳴りひゞく。

かぶろ（名）　頭に毛髮なきことを云ふ。又童子の頭髮を短く切りて、これを結はずして其のまゝに乱し置くことをも云ふ。

かへるがへるも（副）　「かへすがへす」も同じ。

かほよぐさ（名）　「かきつばた」の異名なり。

かまかまし（形）　「かまびすし」に同じ。

かまり（名）　伏勢又伏兵のこと。

かみあがり（名）　崩ずること。「かんさること」なり。

●かふこ　●かみあ

かみあろび（名）　神遊にして神樂に同じ。

かみかうぶり（名）　神に贈らるゝ位にして、之には位田とて、其の位に應じて、田地を附せらるゝものなり。

かみぐら（名）　席の中に於いて、最も上座に位する席なり。即ち上座のこと。

かみなづき（名）　神無月にして陰曆十月の稱なり。

かみのみむろ（名）　神社、神殿のごとき神の御室を云ふ。

かむさる（自動）　魂の去ること。即ち死することを云ふ。

かむたち（名）　神殿の傍に、ありて、神事を執行する館。即ち神館なり。

かむだから（名）　神に奉る所の稻にして神稅なり。

かんどり（名）　舵取の音便なり。

かむながら（副）　神のまゝにて、と云ふこと。

かんにち（名）　曆に於いて、人の外出を凶なりとして定められたる日のこと。坎日の字を當つ。

かむはた（名）　古代に於ける織物の名なり。

かむほぎ（名）　神の祝詞なり。

かむほざき（名）　前項「かむほぎ」に同じ。

かも（感）　疑の天爾波の「か」に、感動詞の「も」を添加したる語なり。

かも（感）　「かな」と云ふに同じ。

かやりび（名）　蚊遣のために燻ぶべき火のこと。

からころか（枕）　着る。着馴らす、などに掛けて用ふる枕詞なり。

からもののつかひ（名）　上古に於いて、唐の渤海などの商船が筑紫の國に來着したるとき、此の事を京へ申すときは乃ち遣はさるゝ使のこと。

かり（接尾）　他の語につきて、副詞とする接尾語、何々の許に」と云へる

●かりこ　●かろら

意を含め「妹許ゆけば」などの如し。

かりごもの（枕）　亂るゝと云ふに掛けて用ふる枕詞なり。

かりもがり（名）　人の死して未だ葬るに至らず、假に棺に藏め置くこと。

かるも（名）　枯れたる草にして、横の搔き集めて臥すに云ふ語なり。

かるもかく（自動）　枯草を搔き集めて、臥すること、是は多くは猪の眠るときに於いて、行ふものにして、取猪の床など云ひ、心を安んじて寐ねがたきものなれば、歌はどには、多く其の急に寄せて云ふこと。

かれひ（名）　乾飯のこと。

かれひつけ（名）　鞍の後橋なる鞍の稱なり。是れ「かれいひ」を此に着けて行くことなれば、斯くの如く云ふなり。

かろらかに（副）　甚だ輕々しき狀に云ふ語なり。

（き）

きね（名）　佛經の語なり。一心に佛を信仰すること。歸依の文字を用ふ。

きぎす（名）　雉子の古名なり。

きくならく（副）　聞道の字を當つ。聞き及ぶには、と云ふ意なり。

きさい（名）　后の音便なり。

きさらぎ（名）　陰曆二月の異稱。

きすぐ（副）　木強の字を當つ。心強くして性質其の儘にて、少しの飾りだもなきことを云ふ。

きせなが（名）　着脊長にして通常の鎧をば、大將のこれを着るにつきて云ふことなり。

きせわた（名）　眞綿をば、圓く且つ扁平になして、菊花の上に着き被ふ。其

●きえ　●きせわ

の色多くは白なり。然れど紅、黄に染めて用ふるものあり。九月重陽の節に用ふ。而して此の綿を以て、顔を拭ひ、身を撫で〻、延年長命を得るものとなせり。

きたなむ（他動）　穢く思ふことなり。

きびはに（副）　幼くしてかよはきこと。

きふきふによりつりやう（句）　急急如律令の字を以てす。呪文の末の句に唱ふる語にして、速に去りて留まることを得ずと云ふ意にして、魔を驅る語なりと云ふ。

きんじき（名）　禁色なり。袍の深紫、深紅などの如き染色の稱なり。此の色は、許可を蒙らざるときは、これを着用すべからざるものなれば、斯くの如く、云ふ又、表袴の管に紋文のあるものをも云へり。

きんぢ（名）　汝と云ふに同じ。

きんのこと（名）　七弦琴を云ふ。

きもなます（名）　肝膾なり。肝を摧くの書なるべしと云ふ。盛衰記に「きもなますをつくり、かたづのめるものもあり」などを見ゆ。

きうやさく（名）　「こゝろばせ」なり。人々の行ひ來れる所の善惡の迹を云ふ。履歴を云ふに同じ。

きらう（他動）　憑る意なり。

きりかけ（名）　板塀の如きものなりと云ふ。

きりぴと（名）　「きりもの」にして、寵愛を受けて、之がために權威ある人のことなり。

きりびをけ（名）　桐火桶なり。桐の木にて作れる火桶のこと。

きろくじよ（名）　古の裁判所にして記錄所なり。後三條天皇始めて設けられし所にして、莊園の券を記錄せられし官なり。後世に至りて、論地の

●くう　●くきや

訴につきて之が裁判所をなすことゝなれり。

（く）

くう（他動）　蹴るを云ふ古言なり。

くうやねんぶつ（名）　空也念佛なり。天台宗の一派にして、常康親王の子空也上人を祖とする佛教の名なり。

くかたち（名）　上世に於いて、事の正邪曲直を判別せんがために、神に誓はしめて、然る後、熱湯の中に手を入れて探らしむ。而して其の湯傷せざるものを正とし、然らざるものを邪とす。探湯の文字を當つ。

くきやう（極）　極まりたる所のことにして、畢竟と同じ。究竟の文字を當つ。

くきやかに（副）　際やかに、と云へることにして、分明なり。

くく（自動）　潜り入ることゝ。

くぐつ（名）　藁にて編みて作れる袋のごときものを云ふ。

くぐつ（名）　偶人を歌に合せて舞はしむる一種の伎を云ふ。即ち傀儡なり後、專ら女の行ふ伎となりしが、降つて舞妓のことに用ひられ、それより終に遊女のことゝなれるなり。

くぐもる（自動）　曇ること、分明ならざることなどに用ひらる。

くご（名）　三韓の琴を云ふ。「くだらごと」なり。箜篌の文字を當つ。

くさあはせ（名）　古、五月五日に於いて、百草を鬪はしめて、遊戯とせしことゝ。

くさずり（名）　鎧の裳なり。鎧の腰に分れて垂るゝ所の短き裾なり。草摺の字を當つ。

くさだか（名）　田の收納したる米の出來高を云ふ。

●くく　●くさだ

くさひとかた（名）草人形にして藁人形の類なり。

くさぶし（名）鹿の野山の臥すてるにして草臥なり。

くさゐなき（名）猪の異名。

くし（形）奇しきこと。

くすりかり（名）五月五日、山野に入りて、薬草を採集すること。薬猟。

くすりび（名）五月五日の稱なり。此の日山野に入りて、薬猟を行ふより斯くのごとき異稱あるに至れるならん。

ぐぜい（名）弘誓なり。佛經の語にして佛の弘く衆生を濟度せんとの誓を云ふ。而して其の弘誓の廣大深甚なることを海にたへて「弘誓の海」又は「誓の海」などと云へり。

くぜち（名）言ひ爭ふことなり。口舌。

くぜつ（名）物言ひ爭ふことなり。口說。此の語は、親しき中に起りし事にあらざれば用ひられず。

くだしぶみ（名）官府より命令するにつき下附せらるゝ文書なり。

くたす（他動）腐らすこと。

くすきがき（名）書を燒筆にて描くことなりと云へり。故に燒筆をば、一に朽筆とも云へり。朽木書と書く。

くちまねび（名）「くちまね」に同じ。

くつかた（名）宮殿の棟に附くる所の飾り物なり。其の最も古製に成れるものにありて、形、靴のごとし。漢字にて鴟尾と書く。

くつろかに（副）寛ぎたる語のこと。

くどく（名）佛經より出でし語にして、善き普のことなり。

くなどのかみ（名）岐の神なり。神の本號を來名戸と唱ふ。

くにが（名）陸に同じ。

くにつかみ（名）　天津神に對して云ふ所の名にして、下土に祀る所の神を云ふ。

くにつもの（名）　土地に産するものにして貢物などに就きて云ふ語なり。

くにのみやつこ（名）　上世にありて、地方を治むるところの世襲の官職なり。國造と書く。

くにみ（名）　高き所よりして、國の形勢を望見することなり。

くは（感）　「こは」云ふに同じ。物事に感じなどして、「是は如何に」の如き即ち是れなり。

くひせ（名）　木の株のこと。

くひぢ（名）　獸類を捕ふる所の器械の名なり。

くぼ（名）　周回の高くして、中央の低き場所。即ち窪なり。

くぼかに（副）　凹みたる形にて、と云ふ意なり。

くぼやかに（副）　「くぼかに」と同じ。

くま（ー）　神に奉る所の精米のこと。

くまぐまし（名）　「へだてがまし」と云ふことにて、心に曲ある狀なり。曲曲と書く。

くめ（名）　貢馬の交字を當つ。貢に供するところの馬なり。

くもがくる（自動）　月の雲に隱るゝなどのこと。又人の隱るゝなどのことを。又人の隱るゝことをば、月の隱るゝに譬へて云へる詞ともなる。又死することにも用ひらるゝなり。

くもがくれ（名）　雲隱るゝこと。「三日月のいつしか雲がくれして」などの「又人の離れて見えずなることにも用ふ。

くもで（名）　蜘蛛の八つ足が、八方へ出でたるが如く、綱などの八方に打

●くわい　●くわん

ち違ひたることをいふ。

くもん（名）　官府より下す所の文書のこと。又出文所に於ける公人の名稱にも用ひらる。

くもんじよ（名）　「まんどころ」しに同じ。其の條下に記す。

くもる（名）　雲井なり。雲のある所、即ち空のこと。又遠き所のことにも用ふ。「雲井にまがふ冲津白波」など。

くらうどどころ（名）　藏人を以て、別に置かれし職なり。是は、後嵯峨天皇の御世に創めて置かれし所なり。此の職は、專ら機密の文書及び諸訴を掌り、且つ小事はこれを奏宣することゝなれり。

くらつかさ（名）　藏司なり。內藏寮に同じ。

くらつぼ（名）　棄馬するに鞍の少しく前か、又は後にかゝることゝ。鞍局なり。

くるほし（形）　狂なり。必の狂ひたるが如きものなり。

くるまぞひ（名）　徒御の文字を當つ。牛事に附くるものを云ふ。

くるやまどり（名）　上古にありて、貴紳の第宅などの門內にある與事の藏め場所なり。

くれがし（名）　「なにがし」、「なにのたれ」といふに同じ。

くれぐれど（副）　心の思ひに暮るゝ狀のことなり。

くれはどり（名）　吳機織の約にして、昔吳の國より渡來せるところの織工のこと。

くろき（名）　白酒と並び稱せらるゝものにして、新嘗祭、大嘗會などのとき供せらるゝ所の一種の酒を云ふ。

くろくさ（名）　人の面皮に發生する所の黑き斑を云ふ。

くろむぎ（名）　蕎麥の古名なり。

●くほか　●くもて

くわいし（名）　和歌又は連歌を正式に詠進するとき用ふる紙なり。初め懐紙を用ひしかば遂に懐紙の名の起るに至りしと云ふ。

くわろ（名）　古、關所を通過するとき示す所の契券の稱なり過所。

くわぢやう（名）　火定なり。佛道を修するものが、火中に投じて入定することを云ふ。

くわんぎだん（名）　觀喜團にして食物の名なり。稅米、菉豆、乾蓮華末、蒸餅、白芥子、酥蜜、及び石蜜を混和して製造したるものなりと云ふ。

くわんさつし（名）　觀察使なり。古、政治の善に官人の行跡などを視察せしむるがために五畿七道へ遣はされし使のことなり。

くわんじゆ（名）　貫首なり。並立つ人の稱に用ふ。又藏人頭の稱にも用ふ。

くわんじよう（名）　還昇なり。殿上人が一たび地下に降りて、庶人となりしが、再び昇殿することを云ふ。

くわんちやう（名）　佛家に於いて、香水を頂に灌ぐ儀典にして灌頂なり。始めて受戒するときにもあり。又修道の昇進にもあることなり。

くわんれさ（名）　年齡六十一に達したるとき、祝賀などと行ふに就いて云ふ語なり。即ち本卦回と謂ふ曆の六十干支の一周して初めに還りたるを祝することに用ゐ。

くゑにち（名）　曆の上に於いて、陰陽相向ひて刻するHとして、諸般の事について凶なりとする日のこと。凶會日。

（け）

け（名）　物を入るゝ器の稱なり。食を盛るなり斯く名づけしものなりと云ふ笥の文字を當つ。萬葉集に「家にあれば、笥に盛る飯を草枕たびにし

●けあひ　●けおそ

あれば椎の葉に盛る」とある即ち是れなり。

けあひ（名）　互に蹴り合ふこと。

けいし（名）　履子にして足駄の類なり。

けいせち（名）　聲折なり。立ちながら腰を前に折りて、禮を行ふこと。

けいちつ（名）　暦にある二十四氣節の一なり。

けう（名）　有ることの稀なること珍らしきことをなぞに用ふ。希有

けうくあんぢごく（名）　佛經にある語にして、八熱地獄の第四の稀を云ふ、叫喚地獄なり。

けうとし（形）　疎ましく思ふと云ふ意なり。氣疎し。

けうみやう（名）　連名と云ふことにて、人名を連記したるものを云ふ。

けうらに（副）　清く麗しきことなり。

けおろし（形）　心に怖ろしきこと。

けおとる（自動）　氣劣にして、「け」は發語なり。即ち劣ると云ふに同じ。

けざよし（形）　氣清にして、「け」は無語なり。即ち清しと云ふこと。

けくにものまうすまうちぎみ（名）　中食國政大夫の漢字を以てす。上古の執政大臣の號なり。

けけれ（名）　心と云ふに同じ。その東國詞なり。

けご（名）　家子の略にして、脊子脊族奴隷の稱なり。

けさ（名）　僧侶が、僧衣の上に着て掛くるものにして、別にこれを製す、然れども古にありては沙門の服にして、原語は、不正色又は雜色の意なり。木蘭色なるを以七本義とす。其の義譯は、忍辱鎧、無垢衣、又は功德衣とす。

けし（名）　「いへづかさ」にして家司なり。家事を取扱はしむるものなり。

けしき（名）　「あうさま」、「けはひ」、「みえ」こどの意なり。氣色。

●けおと　●けしき

げしやく（名）　外戚と云ふに同じ。

げす（名）　賤しき官人を云ふ。下司。

げず（名）　自分の賤しきものを云ふ。下種又は下衆。「げず根生」など。

けだかし（形）　「け」は發語にして近しといふ同じ。

けつしよ（名）　土地を領するものが泥を犯して、亡びたるを以て、其の領主の缺け居ること。闕所。

けつぶん（名）　文章の中に於いて闕け落ちて脱けたることある句を云ふ。

げつらう（名）　月下老人にて、「むすぶのかみ」のこと。

けづりばな（名）　木を削りかけて造れる花のこと。

けづりひ（名）　氷を削りしものにして削氷の文字を當つ。

けづりび（形）　時長しと云ふ意なり。

けながし（形）　「脇」は發語なり。「增」しと云ふに同じ。

けふろく（名）　脇息又は脇足と書く。おしまづきと云へるものにして坐せる一方に置き、肱を掛け、體を凭らせて休らふ所の一種の器なり。

げほふ（名）　外法にして魔術又は妖法のごときを云ふ。

けまん（名）　佛像の頂に飾るものを云ふ。多くは金銀の造花を用ふれども、間に生花を用ふることあり。

げんざ（名）　加持祈禱などのことについて効驗あることなり。驗者。

けんちやん（名）　卷織の字を用ふ。字の唐音なり。黑大豆の「もやし」になしたるものを油にて炒り、之に醬油及び塩りを加へて食するものなり或ひは「けんちゐん」とも云ふ。又轉じて「けんちん」といふあり。豆腐、蓮根、午房のごときものを細やかになし、之を油にていため、汁に煮たるものもあり。

●けわ　●こうち

げゆ（名）　鮮由の文字を書く。國司などの其の任を終るとき、官稅などの如きもの、滯りなく、後任の人より受領するを文書を云ふ。

げらふ（名）　騰を積むことの短かきものを云ふ。下騰。

けり（助動）　來と有りとの約なり。過去の意を示す所の助動詞にして、「見たりけり」、「行きけり」などの如し。

（こ）

こいたじき（名）　禁中なる殿上の南雪の小庭よりして殿に上る所の板敷の稱にして、小板敷なり。

こいふす（自動）　縮びて臥すこと。

こうず（自動）　困なの音便なり。「なやみわづらふ」との意なり。

こうちぎ（名）　婦人の禮服なり。裳、唐衣などを着る上に打掛けて着用するものなり。地は、綾にして染色は種々ありと云へり。廣袖にて裏のあるものなり。小袿。

こうらうでん（名）　清涼殿なり。清涼殿北方に在る殿なり。

こがくる（自動）　木蔭に隱ること。

こぎ（名）　國忌の字を當つ。天皇、皇法などの御忌日の稱なり。

こきたし（形）　多しと云ふ意なり。「三笠山野べゆくみちは已伎多雲、疑にあれたるか、久にあらなくに」

こきたる（自動）　搔垂ねに同じ。

ごくすゐのえん（名）　「まがりみづのとよのあかり」にして、曲水宴なり上巳の日にある禁中に於ける酒宴なり。御前に於いて詩を作り、宴を賜はるものとす。元來此の宴は、流水の邊に於いて、其の水上より酒盃を流して、我が前を流れ過ぐる時、其の未だ通過せざる間に、詩を作りて、其の

●こうち　●こくす

酒盃を取り揚げこれにて酒を飲むことを云ふ。

こくも（名）母國にして、天皇の母君を云ふ。即ち皇太后の稱。

こぐれ（名）木の下にありて暗き場所のこと。

ごけい（名）御禊の文字を書く天子大嘗會の御禊など。禊の敬稱なり。

こけら（名）苔に同じ。

ここら（副）多く、夥多などの意に用ひらるるなり。

こころいられ（名）心の奇つこと。

こころねきて（名）心の處置を云ふ。

こころづから（副）己か心からして、と云ふ意。

こころば（名）心葉なり。大嘗會に於いて、冠の上に掛くるものにして、天皇は、銀にて造りし櫻の挿頭、大臣は藤、大納言及び中納言は玉吹、參議は梅の形をなしたるものにして、滅金なりと云ふ。又贈物などに附くる所の飾り物のことにも用ふ。帛に銀の梅花を附け、これに掲卷の糸を添ふるなど麗しきものなりと云ふ。

こころもとなし（形）「おぼつかなし」との意に用ふ。又待遠にして心の苛つことにも用ひらるゝなり。

ここいゆるび（名）心の怠りなり。

こざけ（名）甘酒の類なり。

こし（名）冠の名所にして、頂上に高く掛りたる所のものを云ふ。小子と書く。

こし（名）四角にして稍長く四脚なるものにして、腰掛くる具なり。兀子。

こしかた（名）門の中央にあるものにして地上に着きたる桟のごときを云ふ。冠の巾子の形に似たれば、巾子形と云ふ。

こしきわら（名）　甑の底に敷き込む物にして、今の簀のごときものなり。甑藁と書く。

こしげし（形）　木立の繁れること。

こじた（名）　病氣の爲めに舌の根の膨れ上りて、別に舌のごときものを生じたるを云ふ。重舌と書く。

こしばせ（名）　腰の狀にて、俗に所謂腰つきのこと。腰の樣子なり。

こじら（名）　入相といふに同じ。

ごしよどころ（名）　禁中の園林房にありて御書籍を支配する所の職なり。御書所と書く。

こしらふ（他動）　「なだめて執成すこと」を云ふ。

こじり（名）　榎の端になる飾なり。小後と書く。

ごぜ（名）　婦人の稱呼に添へて、尊び呼ぶ所の語なり。「母ごぜ」「姫ごぜ」などの類にして御前の字を當つ。

ごせつ（名）　陰暦十一月の中の丑の日に行はるゝ所の女樂の稱なり。五節。

こだかし（名）　梢の高きを云ふ。

こちく（名）　歌には、多くは此方來と言ひ掛けたり。胡竹にして笛の竹なり。

こづくる（他動）　木造なり。木を制りなどして用に供すること。

こづたう（自動）　木傳ふなり。木の枝より枝へ移り行くこと。

ことつはい（名）　元日に於いて、殿上人のみ、賀凉殿の東庭にて、拜賀をなす儀式にして小朝拜と書く。是は、朝拜ある年に行はず、無き年にのみ行はる。

ことあげ（名）　特に之と言ひ立つること。言擧の文字を當つ。

ことかた（名）　變りたる所、別の所などにして、異方なり。

ことごと（名）　外の事、變りたる事にして異事なり。

ことごとに（副）　別別に、との意なり。「異異に」

こしたま（名）　言葉に靈ありて、自由自在に用をなすことを云ふ。即ち言語の妙用とす。言靈。

ことどころ（名）　變りたる場所のことにして異處。

ことのはぐさ（名）　物言ふ所の材料を云ふ。言葉種なり。

ことりづかい（名）　上古にありて、防人の役を充て催し、或ひは七月に於ける相撲の公事の場合に於いて、諸國の力士を召集するなどの爲めに遣はさるゝ使のこと。部頭使の文字を當つ。

このきみ（名）　竹の異名。

このしたやみ（名）　木の下の繁りて甚だ闇きことを云ふ。木下闇。

このみちのたくみ（名）　大工に同じ。

このゑふ（名）　宮中に近く奉仕する所の武官の府なり。近衛の音の轉じたるものにして近衛府なり。

このわたる（自動）　戀ひつゝ年月を過ごすことなり。

こぼこぼと（副）　物の音響き立つに用ふる語なり。

こまくら（名）　木枕にして、木にて作りし枕のこと。

ごむにち（名）　曆に於いて、家作りに吉なりとして用ふる日。五墓日を書く。

こむらがへり（名）　腓返りにして腓の筋自のひきつること。

こむらさき（名）　濃紫にして色の濃き紫なり。三位以上の人の袍の色などに用ふるもの。

こんりよら（名）　天子の御禮服の稱を云ふ。色赤くして日、月、星辰、龍、虫、火

●こめく　●こやう

なぞの亂なぞを繕ひ合せるものにして、御即位、大嘗會などのときに着たまふものとす。

こめく（自動）「こぞもらしくあり」と云ふ意。

こもりくの（名）大和の國泊瀬の地名に掛けて云ふ枕詞なり。

こよりもの（名）物を煮て凍らしめたるものなり。浴に所謂煮こゞり是れなり。

こり（名）眞言宗の行に、水にて潔齊すること。垢離なり。「水垢離をなして」などの如し。

こもやう（名）陰陽寮に於いて、疫病神を祭る所の稱なり。又人の怨靈の祟をなすことを鎭むるが爲めに祭りをなすことをも云ふ。

こうもづつみ（名）風呂敷、服紗のごとき類を云ふ。衣包なり。

ごわう（名）祇園、八幡、熊野などの神社より出す所の牛王寶命と記したる神符のみなり。

こわざま（名）物を言ふ狀、聲狀。又「てかざし」とも云ふ。

こわづかひ（名）聲遣にして、物狀言ふなり。

こわづくる（名）「しはぶきをする」、「せきばからいをする」などの類にして聲作なり。

こわぶり（名）額を歌ふ調子のこと。聲振。

こゐ（名）鷹の木に止まり居ること。

こをろこをろに（副）潮の漸々に凝りゆく狀を云ふ。「てをろてをろ」の「を」は、「こ」の音の轉なり。

（さ）

さいさやう（名）八將神の一にして地神なり。其の年の此の方面に向ひ

●こわざ　●さいさ

て、土地を動かし、又は耕耘するなぜのことを忍めりと云ふ。

さいぐう（名）　上古、天皇の御即位あるごとに、内親王又は亡主の未だ嫁し給はざる人を撰びて、伊勢神宮及び加茂神社に奉祀せしめられたり。加茂神社は、天皇の御産土神なり。此の奉祀せしめられたるを共に齊王と唱へらる。而して其の居所を齊宮と申す。然れども伊勢なるを齊宮と云ひ、加茂なるを齊院又は齋宮と稱せり。

さいし（名）　際涯にして、時、時機などのこと。

さいす（名）　際主にして、際を主る人のこと。

さいた（名）　最初なり。

さいたづま（名）　春の若草の稱なりと云ふ。「さいた」は、「割出」の音便の轉じたるもの、「つま」は、芽の相對へる義なりと云ふ。

さいだて（名）　射を習ふことなりと云ふ。戲射の字を當つ。

さいで（名）　布帛の裁ち片のこと。

さいなむ（他動）　「叱る」なぜのこと。又苛く責むるなぜのこと。

さいのかはら（名）　賽河原なり。俗說に、冥土にある川邊にして、小兒の亡者が、小石を積みて遊び居れると云ふ、場所なり。

さいは（名）　八將神の一にして、水神を云ふ。其の年の此の方位に向ひては移徙又は船乘初をなすことを忌むと云ふ。

さいはて（名）　最極の義にして、最後になることを云ふ。

さいまぐ（自動）　さかしらに差出でがましく物言ふこと。

さいらぐ（自動）　才氣ある樣に見せ掛くる意なり。

ざうざうし（形）　「さはがしきこと」又「さゝしき」意にも用ひらる。

ざうし（名）　禁中などの官人、女官の用部屋にして局なり。又昔、大學寮の內にありて、人を教授したる場所を云ふ。いづれも曹司の文字を當つ。

●さうし　●さかし

ざうしまち（名）　禁中に於いて、曹司の數多居る所を云ふ。曹司町。

ざうじん（名）　精進に同じ。

ざうじもの（名）　精進物と云ふに同じ。

ざうぶれん（名）　想夫憐なり。雅樂の曲の名。

ざえ（名）　才の旨にして才智のことを云ふ。又學問のことをも云ふ。文藝能のことにも用ひらる。

ざえのおばえ（名）　才の覺にして、學藝の心得を云ふ。

さかり（名）　倭文布の幅狹く縫れるものなりと云ふ。

さが（名）　性質のこと。性。

さかがり（名）　酒と醉でて怒り狂ふことなり。

さかき（名）　常綠樹の總稱に用ふ。即ち榮樹のこと。又木の名、榊。

さかし（形）　才智の勝れたること。賢。

さかしがる（自動）　賢しき狀態をなすこと。

さかしらに（副）　「かしてがる」こと。

さがなし（形）　善からぬこと。即ち不詳なり。

さかばえに（副）　榮え盛ること。榮映なり。

さかふ（他動）　界すること。

ちかふ（自動）　盛になること。榮。

さかもぎ（名）　逆茂木、又鹿柴とも書けり。棘の枝を立て連ねて、これを逆立て、垣のごとくに結ひて、敵の兵馬の進入することを防ぐ爲めのものなり。

さかる（自動）　盛るにして榮ゆに通ず。又離れ裂くる意にも用ひらる。即ち裂くると相通ずと云ふ。

さきし（形）　幸福のことなり。

●さかし　●さきし

ささなむ（他動）「さいな・む」に同じ。

ささほふ（自動）　幸福を與ふること。

ささもり（名）　防人の文字を當つ。古、軍團の兵をば、筑紫太宰府に送りて備へられし所のものなり。三年の交代なり。壹岐及び對馬に於いては島守の文字を用ひらる。

ささらがさね（名）　襲の色目にして、表は白く、裏は、濃き蘇枋色のものなり。

ささらがり（名）　櫻を山野を見歩きて遊ぶこと、俗に所謂花見なり。

ささりあぐ（他動）　俗に云ふ、しやくりあげる」にて、聲を引きて泣くこと。

ざけ（名）　邪氣にして邪祟のこと。

ささへごと（名）　讒言の事にして支言なり。

ささめごと（名）　小聲にて、ひそ〳〵と談しすること。私語なり。

さしながら（副）「さながら」に同じ。「し」は天爾波の休め詞なり。

さしもぐさ（名）「よもぎ」「もぐさ」に同じ。艾の字を當つ。

さすがに（副）　本分を失ふことを欲せざる意を云ふ語なり、又本を失はぬを褒むる意をも云ふ。流石、遺有、樂など。

さずき（名）　假に構造したる所の床。

さすのみこ（名）　陰陽道に於いて、卜筮などを以て、豫め未來の事を指示するを云ふ認なり。指御子。

さすらふ（自動）　寄る邊なくして、諸所に漂ふこと。流離。

さださだと（副）「たしかに」と云ふこと。定を重ねたる語なり。

さだすぐ（自動）　人の年齢の盛りを過ぎたること。語に所謂「ふける」こと。

さちのみ（名）　狩獵のときに用ふる弓のこと。彦火火出見尊、山の幸おはしければ、弓矢にて、多くの鳥獸を獲たまひしより斯くは云へるなりと。

さばへなす（副）　五月蠅のごときを云ふ。又騒がしきことの枕詞にも用ひらるゝもの」とす。

ざふしき（名）　藏人所に屬して、雜役に使用せらるゝ人の稱。多くは良家の子弟、これに補せらるゝものとす。

さへのかみ（名）　道祖の文字を當つ。道の神、布那土の神、手向の神など、皆相同じ。是は伊弉諾神の投げたまへる杖によりて生れたまへる神なりと云ふ。

さほひめ（名）　春の神と云ふ。佐保は、大和の地名なり。奈良の都より東にあり。

さまよふ（自動）「なげきよぶ」こと、呻吟の字を用ふ。

さまよふ（自動）　塲所を定め得ずして、動き移ること。又行き迷ふことにも用ひらるゝなり。

さみだれ（名）　五月雨の文字を用ふ。陰暦五月の頃に於いて、降り續く所の霖雨の稱なり。

さんがのつ（名）　三箇の津にして、筑前の博多、伊勢の安濃津及び薩摩の坊の津の三ケ所を指して、古に云へること。又或ひは安濃津を除きて、和泉の堺の津を加ふるもあり。

さんがのへ（名）　前項の語の誤り轉じたるものにして、京都、江戸及び大阪の三都を指して稱することと。

さむけし（名）　寒き有樣に見ゆること。

さんぎふらふ（句）　肯ひ答ふる所の敬稱にして、然に候ふの音便なり。

さむしろ（名）「むしろ」と云ふに同じきこと。「さむしろ」の「さ」へ、發語なり。

さらがへる（自動）　更に元に立め返ること、更返。

さらでだに（副）「さらぬだに」と同じ。左樣にあらぬだに」といふ語。

●さらぬ　●さをし

さらぬぞに（副）「左樣になくとても」といふこと。

さらうじゆ（名）　沙羅雙樹なり。佛經に謂ふ所の樹の名。沙羅は梵語にして、堅固と譯す。

さらぼふ（自動）　雨露に曝されて、骨のみとなること。

さらめく（自動）　さら〳〵と音の立つことなり。

さるがく（名）　諸讃のことを演ずる一種の踊のごときものなり。然れども音樂舞曲の備はれるものにあらざるなり。音樂と書く。其の音の轉じたるものなりとす。

ざれもの（名）　好みて戯るゝ人。

さわたる（自動）　「さ」は發語にして、渡ると云ふに同じ。

さをしか（名）　「さ」は發語にして牡鹿と云ふに同じ。小牡鹿。

（し）

しうとく（名）　宿德の文字を當つ。身に德を積みたる人のこと。

しかすがに（副）　「然するからに」と云ふ意味なり。後撰樂に「かきくらし、雪はふりつゝ、しかすがに、我家の園に、鶯ぞなく」とあるが如き是れなり。

しがらむ（他動）　「からみつくること」にて繁く絡むの意なりと云ふ。

しきがみ（名）　陰陽道に於いて行ふ所の咒詛の妖術なり。武神、又識神とも書く。

しきだい（名）　人に禮儀をなすことを云ふ。即ち會釋。又口に追從を言ふにも用ひらる。

しきたへの（枕）　禮、神、床、枕、家などに掛けて言ふ所の枕詞なり。

しきなみ（名）　頻りに寄せ來る波を云ふ。頻浪。

●しうと　●ししま

しきなみに（副）「しきりに」などの意に用ひらる。

しきらう（名）　食物を盛る所の器なり。食籠。

しこ（名）　醸きものを罵る語にして、醜なり。醸男、醸女など。

しこ（名）　左にありて矢を盛る器なりと云ふ。後世、一種やなぐひに似て、粗略なるものを稱するの語となれり。

しこづ（他動）　誹り告ぐること。

ししし（名）　至四にして、四方の界目のこと。

してこらかす（他動）　病氣を癒さんと欲して、療し損ふこと。

ししびし（名）「しはから」のことにして、自にて作れる總ての響なり。

ししま（名）　物言ふことを止むること。無言なり。

ししまふ（自動）　進み得ず、退き得ざること、進退維谷ることなり蹙るの文字を用ふ。

ししん（名）　四神にして四方の稱なり。東を青龍、西を白虎、南を朱雀、北を玄武と云ふ。王の四方の星象が、各々其の形をなすものなりとして、斯くの名づくるなり。

ししむら（名）　切りし肉の塊にして、臠なり。

した（名）　心の底のこと。

した（名）　笙の笛の管頭ごとにありて、横に其の中に着くるものなり。吹けば皷動して音響を發するものなり。

しだく（他動）　碎き折ると云ふ意なり。

したしたと（副）　萎ねてしなだるゝ有樣に云ふ語なり。

しただむ（自動）　物言の訛まること。

したつき（名）　物言の分明はらざることを云ふ。

したてる（他動）　下葉の赤く輝き照ることなり。

したどし（形）　物の言方の速なること。

したなき（名）　心に隠し泣くこと。

したりがほ（名）　仕済ましたりとて、誇る所の顔色を云ふ。

しだりを（名）　長く垂るゝ尾のこと。

しぢ（名）　車輿の轅の臺のこと。蹈臺、腰掛のごとき類を云ふ。

しちじやう（名）　七情なり。即ち怒ること、喜ぶこと、哀むこと、楽しむこと、愛づること、憎むこと、欲することの七つの情なり。

じちやう（名）　古、役によりて使はるゝ所の丁なり。又禁中の掃除などに使はるゝものをも云へり。

しづけし（形）　静なる狀態のこと。

しづごころ（名）　静けき心、落着きたる心などに用ひらる。

しつぱうぐれ（名）　舊暦書の上に、甲申より癸巳まで、十日間の稱なり。此

の期間に於いては、十方の気、暗刻するものなれば和合を去ると唱へて、談事に忌み嫌ふと云へり。十方暮。

しづり（名）　板の上に積りし雪の落つること。

しとと（副）　「したたかに」と云ふ意「しとと雪の降りしきりければ」など。

しどろもどろに（副）　次第なく打ち亂れたる狀にいふを「しどろに」と云ふ。これを重ねたるものにて、更に甚だしと云ふ所の語なり。

しなてる（枕）　片といふことの枕詞。

しなどのかぜ（名）　風の名にして、科戸の風なり。神代紀に、級長戸邊の命。風の神の名。

しなむ（他動）　隠すといふことの古言。

しぬぐ（他動）　「しのぐ」に同じ。

しぬに（副）　「しなびしほるゝ」こと。

●しぬの　●しはぶ

しぬのめの（枕）　忍ぶといふ語に掛くる枕詞なり。篠目。

しの（名）　撓ふこと、又靡くものゝごときをいふ。

しのびごと（名）　隱言なり。ひそ〳〵はなし、「さゝめごと」などに同じ。

しのびごと（名）　隱事なり。隱して行ふことを云ふ。

しのぶずり（名）　忍摺なり。古、忍草の莖葉にて、布帛に種々の形を、摺り附けたるものなりと云ふ。其の紋は、恰も亂れ髮のごとく打違へに捩れたる狀に摺り出せるものにして、誠に麗しきものなり。「しのぶもじずり」など。

しのや（名）　篠屋なり。篠、葦などにて葺きたる小屋を云ふ。

しばだつ（自動）　音の繁く聞ゆること。

しばなき（自動）　繁く鳴くこと、繁鳴くの義なるべし。

しはぶかふ（自動）　咳をなすことにして、「しはぶく」の延びたるものなり。

しひな（名）　殼の實らずして、粃殼なるものを云ふ。「しいなせ」の略言なり。

しびら（名）　男は袴の上に、女は裳の上に着くるものにして、表裳に同じ。裙。

じなにりつ（名）　音樂の調子にある十二種のものなり。壹越、斷金、平調、勝絕、下無、雙調、鳧鐘、黃鐘、鸞鏡、盤涉、神仙、上無の十二とす。

しばがれる（名）　潮干に同じと云ふ

しぶしぶと（副）　濡れそぼつる狀に云ふ語なり。

しはたる（自動）　潮垂にして、潮水を垂らすこと。又涙にて、袖の濡るゝことにも用ひらる。又轉じて、歎きに沈むことなどにも用ひらるゝなり。

しはなわ（名）　潮の泡のこと。

しはみつに（名）　潮滿瓊なり。神代紀にいへる所にて、潮を滿ちしむる珠なりと云ふ。

しまがくる（自動）　島の蔭に隠るゝことを云ふ。

しまつどり（枕）　島の島の義にして、鵜の枕詞に用ふ。

しみみに（副）「繁く」と云ふこと。

しみらに（副）「しみ」は繁き意をあらはし「ら」は助辭なるべしと云ふ。

しんい（名）　瞋恚なり。佛經の語にして怒りを發すること。「瞋恚のほむら」を燃やして」など。

しんぶち（名）　佛教の語なり。新發意の字を用ふ。新に佛門に入りたる人の稱。

しめじめと（副）　打ちしめりたる狀に云ふ語なり。

しめやかに（副）　鎮まりし狀に云ふ語。

しもくち（名）「しもやけ」に同じ。

しもぐもり（名）　霜の降らんとして空の曇ること。霜曇。

しもと（名）　刑罰に用ふる具、これにて笞つことなり。「笞の苦みなど」。

しやうくわん（名）　政官なり。太政官に奉仕する官人のこと。

しやうげ（名）　陰陽家にあいては、正月を以て子の月となし、それより順に十二ケ月に十二支を配當し、之を八卦の方位に充て、其の人の其の年に當りて、善き方位を云ふものなり。生氣。

じやうず（名）　貴人の稱なり。上衆。

しやうにち（名）　喪に丁りて、四十九日目の稱を云ふ。

じやうめ（名）　上馬なり。勝れたる駿馬のこと。

じやうらふ（名）　上臈なり。臈を積みたる人のこと。又二位三位の典侍の稱にも用ひらるゝ身分の貴き婦人の稱にも用ひらるゝなり。

しやつ（名）　彼といふに同じ。罵りて言ふ場合に用ひらるゝなり。

しやば（名）　娑婆にして梵語なり。忍土又は忍界などと譯す。

●しゆか　●しらか

しゆかい（名）　酒洵なり。上古、酒を盛る器物の名

しゆくし（名）　宿紙なり。又「すくし」とも云ふ。漉返しの紙なり。

しゆげんだう（名）　修驗道なり。佛教の一派にして役の公小角を祖とす。醍醐の僧、聖寶なるものゝを起したり。

じゆごう（名）　皇后に準ずるとの意より准后の文字を用ふ。女官の皇子、皇女などを生みたまひしものに、時として賜はる所の稱號なり。

じゆんさんぐう（名）　准三后なり。時として攝政關白などに賜はる所の重き稱號なり。

しよくゑ（名）　觸穢なり。穢れに觸るゝこと服忌。又は産の穢れなど、皆此の語を用ふ。

しよち（名）　所知なり。所頭の土地のこと。

しらかす（名）　饅頭の皮に製すべき甘酒の如きものなりと云ふ。

しらす（名）　白洲なり。白き砂の洲を云ふ。又裁判所の罪人を糺問する場所をも、昔は斯く云へり。

しらす（他動）　「しろす」に同じ。

しらまゆみ（名）　白木の眞弓を云ふ。白眞弓。

しらまゆみ（枕）　白檀弓なり、射る、引く、張る、などに掛けて云ふ枕詞。

しりうごつ（名）　「かげごと」を云ふ。

しりうごと（名）　人の聞き居らぬ場所に於いて、其の人の身の上の事に就いて言ふこと。「かげごと」なり。

しりがき（名）　馬具の名。今、昔便にて「しりがい」と云ふ。

しりくめなは（名）　繩を引き延べて、其の部分を指示して、入れしめざる標となすものを云ふ。尻久米繩。

しりたぶら（名）　「しりぶた」、「しりたむら」などと云ひて尻の肉の多き所

○しりは　●しろき

の稱なり。

しりはら（名）　産後に腹のいたむこと、後腹と云ふに同じ。

しりぶ（名）　末の弱くなることを云ふなり。後平の字を用ふ。

しりへて（名）　後手なり。手を後に回すことなり。

しりぬ（名）　俗に所謂しりもちをつく」と云へることにて後に倒れて、尻を地に着くることなり。

しるしばかり（名）　「ひさゝかすこし」と云へる意なり。

しるまし（名）　兆のこと。前表のことなり。

しれがまし（形）　痴れがましきこと。

しろ（名）　田の廣袤を測る所の語なり。二百五十歩を以て、五十代とす

しろきもの（名）　今の所謂白粉なるべしと云ふ。顔に附けて白く裝ふものの。

しろふ（動）　互に物する意の語なり。

しわぶ（形）　爲すに煩むこと。

しゑや（感）　嘆息の聲なり。

しをに（名）　草の名、紫苑の古名。

しをりど（名）　木の枝を撓りかけなどして、作れる戸のこと。

す、ず

すあふ（名）　素襖なり。又素袍とも書く。襖、袍ともに其の字義を同じうす。襖は、上に着用する所の禮服なり。官位ある人にありては、綾などにて縫ふなり。無位無官のものは、麻布を用ひて縫ふが故に、これを素袍と云へり。素は、少しも飾りなくして粗末なるものを云ふ。

すいがき（名）　竹を並べて結へる所の垣の名。普便にて「すいがい」とも云

○しろふ　●すいか

ふ。

ずうず（他動）誦すと云ふ音便なり。物を讀むこと

すがき（和）和琴の彈き方の名なり。「すがかくこと」

すがき（名）竹の垣のこと。

すがき（名）床に掻きたる簀の子なり。

すがく（自動）蜘蛛の巣を構成することを云ふ。

すがごも（名）菅にて編める所の蓆を云ふ。

すがすがし（形）爽かにて快きこと。又滯りなきこと。

すがなし（形）因所なしと云へる略かと云へり。

すがのねの（枕）長き、亂るゝ根などゝ云へるに掛けての枕詞を云ふ。

すがやかに（副）清清し、縮りあく、と云へる語。

すきごと（名）物好なること、好色のことなどに用ふ。

すきすき（副）次々に、又續くと云ふ意に用ひらるゝなり。

すきもの（名）物好、好事の人などを云ふに用ふ。

ずきやう（名）誦、經なり。佛經を讀むことに用ふ。

すきわざ（名）好色のこと。

すが（自動）好色と云ふに同じ。

すくえう（名）宿曜なり。二十八宿九曜の行度を以て、人々の運命を考ふる技を云ふ。

すくすくと（副）滯らずして速に成り行く樣子のこと

すくね（名）上古にありて、民等を尊び親しみて呼べる敬稱。又後に、姐の稱に用ひらるゝなり。

すくも（名）泥炭の稱なりと云ふ。

すくまかに（副）傾かず、撓まず、すく〳〵としたる形態を云ふ。

●すけ　●すたく

すけ（名）　家の脇に倒れんとするとき、これを支ふる所の柱なり。樗柱。

すごも（名）　竹を籠のごとく編みて、白き生絹を裏に附けて、其の縁の白きものを云ふ。多くは食机の下に用ひる敷物のことなり。

ずさ（名）　從者にして供人のこと。

すざく（名）　四神の部に詳記す。

すさむ（他動）　楽つ、措く、止むるなどの處に用ひらる。

すすたる（自動）　煤の垂れ下ること。

すずめゆめ（名）　揚弓の類にして、雀などのごとき小鳥を捕ふる弓のこと。雀弓と書く。

すずろはし（形）　心のすゞろになること。「はしれなし」又不覺と云ふにも用ひらる。漢字の漫然と云ふに同じ。

○すだく（自動）　集る、多く集ふなどに云へる意に用ふ。

ずたずたに（副）　細かに切れ〳〵になること。

すぢなし（形）　爲すべき道のなきことを無筋の字を用ふ。

すてをぶね（名）　乘り捨てゝ人の居らざる船なり。捨小舟。

すなどる（他動）　魚を搜し求めて捕ること。

すばなる（自動）　獨り離れて居ることを云ふ。

すべがみ（名）　神の尊稱にして「すべらがみ」又は「すめがみ」。

すべす（他動）「すべらかす」

すべら（名）　天神、天皇などに關して、之に冠する所の說なり。

すべらぎ（名）　日本の天皇の尊稱なり。天が下を知ろし召す大君のこと。

ずほふ（名）　佛法の祈を行ふこと。

すまひ（名）　二人力を角すること。

すまふ（名）　前項の語の訛りなり。

●すたす　●すまふ

すまふ（自動）　負けざるべしとて、爭ふことを云ふ。

すみうかる（自動）　住家に落ち居ることなくして、出でゝ漂ふことなり。

すみなは（名）　墨壺の一方に輪ありて、之に細き麻糸を捲き附け置き、これを伸ばすと捲くとに依りて、其の麻糸に墨を附けて、之にて直しく線を引張る具なり。墨繩と書く。

すみやく（自動）　速かになること、急ぐこと。

すんざ（名）　從者の音便なり。

ずんず（他動）　誦すの音便なり。

すめらぎ（名）　「すべらき」に同じ。天皇のこと。

すめろぎ（名）　「すめらぎ」に同じ。天皇のこと。

すり（名）　篦なり。竹細工に成れる箱にして、旅の用に供するもの。「おいすり」の條を參照すべし。

すろ（名）　棕櫚に同じ。

すゐかん（名）　糊を用ふることなくして、水張にして乾したる絹のこと、又常に專ら水干の狩衣の略稱なり。其の製、狩衣に異ならず。

すゐさう（名）　水晶に同じ。

ずゐしんもん（名）　隨身門なり。神社の門の兩傍に、兵仗の隨身の裝をなしたる像を置きたるものを云ふ。俗に所謂、矢大臣左大臣のこと。

すゐひ（名）　極めて細末なる粉を得る所の法なり。粉を水に搔き交ぜ、粗きは沈み、細きは浮きたるを、更に他の器に移し入れ。又前のごとくになして、これを行ふこと數度にして、其の沈澱したるものを乾かして取ることなり。水飛と書けども水簸の誤りなるべし。

ずゐひやう（名）　供に從ふ所の兵士を云ふ。

すゑつむはな（名）　紅花の別名。

すゑひろ（名）扇子の異名なり。開くときは、其の末の廣がる故に、斯くのごとく云ふなり。又「すゑひろがり」とも云ふ。

すゑもの（名）陶物なり。「やきもの」に同じ。

せ

せ（名）古、兄又は夫など。總て女より男を親しみて呼べる事なり。兄、夫。

せいぐわ（名）華族三公に任ぜられたる家筋のこと。久我醍醐、德大寺、西園寺などの如し。清華。

せいた（名）圓き木材を方なる板に挽割りて、其の兩端に殘れる所の凸なる板のこと。脊板。

せいたか（名）不動明王の脇士の名にして、右手に金剛杖をつき、左手に三鈷を握れり。制吒迦。

せいびやう（名）弓勢の強きこと。精兵。

せう（名）鷹の雄の稱呼なり。「せ」は、夫の義、「う」は鷹の音の約なるべしと云ふ。

せうことなし（形）爲すべき手段のなき事。俗に所謂「仕方なしに」と云ふ意に用ひらる

せうじん（名）年若き人にして少年のこと。小人、又、無智の民をも云ふ語に用ひらる。又心狹くして邪なる人にも用ひらるゝ語なり。

せうろく（名）消息にして「おとづれ」「たより」など云ふに同じ。

せうろこ（名）「おとなふこと」、「おとづるゝこと」。又音信を通ずるなどのことにも用ひらる。

せうと（名）兄と云ふに同じ。兄。兄人の音便なりと云ふ。

せうに（名）大宰府の次官にして、大貳に次ぐ。少貳。

せうび（名）　魚狗に同じ。少微にして古名「そび」の訛なり。

せがい（名）　舟舷に緣の如く板を渡したる所なりと云ふ。脊櫂の義なりといふ。

せがき（名）　無緣の亡者の靈に向つて、讀經供養をなすこと。即ち餓鬼に施すことにして施餓鬼なり。

せきたい（名）　束帶のとき、袍の腰を束ぬべき一種の帶にして、草にて製作し、黑漆にて塗り、玉を飾りに附けたるものを以て、最も貴しとなすものなり。故に一に玉の帶とも云ふ。且つ其の飾りは、種々ありて一樣ならずと雖も、概ね瑪瑙、犀角、蠟石などにして、其の形も、圓又は角なるものなど一樣ならず、石帶。

せきだい（名）　植木鉢を置く臺なり。石臺。又方圓の箱に草花を植ゑ、山水の景などに模したるものをも云ふ。石盆、栽盆と稱するもの丶如き、即ち

是れなり。

せきだかづら（名）　草の名。絡石の一種なり。雪踏葛。

せきて（名）　關所を通過する人より取上ぐる所の錢。關直の約にして、關手の文字を當つ。

せきのと（名）　關の門なり。

せきもり（名）　關所を守る役人。

せぎり（名）　瀨を押し切りて、流れ行くこと。瀨切。

せく（名）　節供に同じ。

せく（自動）　「いらだつ」「いそぐ」などの意に用ひらる。

せく（他動）　「促がす」「急がす」などの意に用ひらる。

ぜく（名）　詩の絶句に同じ。

せぐくまる（自動）　身體の前方に傾くこと。脊屈るの義なり。

せぐ（名）「せむし」に同じ。佝僂。

せざい（名）前栽に同じ。庭園のことなり。

せしがき（名）宣旨書に同じ。

ぜじやう（名）「せんじやう」に同じ。軟障。其の條に詳記す。

せしゆ（名）物を僧に施行する人のことなり。又法事、葬儀又は供養などする主のことにも用ひらる。

せせこまし（形）狹くして寛かならざる意に用ひらる。

せだえ（名）澁を流るゝ水の斷えたることにして、瀧斷なり。

せたむ（他動）強く責めさいなむこと。漢字の痛責に相當す。

せち（名）四季氣候の變る時を云ふ。節日など。

せつく（名）節日に供する所の食物にして節供なり。即ち元日の膳、正月七日の七草粥、上巳の草餅、端午の粽、七夕の索餅、玄猪の猪子餅のごときを云ふ。

せちに（副）「切に」にして、心に深くと云ふ意なり。

せちぶん（名）氣候の立春、立夏、立秋、立冬に移る節のことにして、節分なり。後には、專ら立春の節にのみに用ひらるゝことゝなれり。

せちみ（名）齋日に於いて、精進潔齋することを云ふ。

せちゑ（名）朝廷に於いて、節日其の他定まれる公事あるとき、天皇出御ありて、御前に於いて、群臣に酒饌を賜はる。白馬の節會、豐明の節會、元日の節會、蹈歌の節會などは、最も重きものなり其の他、立后、立坊、任大臣、相撲の節會などの如きあり。

せつか（名）馬の脊筋のこと。

せつかひ（名）飯杓子の頭の半片なるものを云ふ。

せつく（名）節供の誤轉したるものにして、人日、上巳、端午、七夕、重陽の五

箇の節日を云ふ。これを稱して五節句とは云へり。

せつしやう（名）　天皇を輔佐し奉りて、萬機の政を攝ね行ふ職なり。是はもと多くは幼帝又は女帝のときなどに置かれたるなり。攝政。

せつとう（名）　俗に所謂「ぼんぼり」にして雪洞なり。木又は竹にて框を作り、之を白紙にて張り、燈の上に被ふものなり。

せつぶん（名）　立春の前夜の稱號なり。尙ほ節分の條を參照すべし。

せと（名）　瀬戸にして海峽のこと。即ち兩方より陸地の相迫りて其の間に海水を通ずる所の稱なり。一に迫門とも書く。

せど（名）　裏口又は裏門の義にして、背門なり。

せどうか（名）　旋頭歌の文字を當つ。和歌の一體なり。五七七の三句なるを上の句即ち混本歌と云ひ、此の末に下の句を混じたるが如きものなればなり。これを二首相合せたるがごとく、本末ともに各々五七七の六句に詠むを云ふ。然れども後世に至りては、通常の歌の下の句の方に七字の句又は五字の句を加へたるものをも、旋頭歌といふに至れり。

ぜにがた（名）　錢の形に紙を切りて、これを神に供するもの。錢形の文字を當つ。錢切の幣。

ぜにきり（名）　「ぜにがた」の條を參照すべし。

ぜにつら　名　錢差に同じ。漢字の繩の字に當る。

せばし（形）　「せまし」に同じ。

せばせばし（形）　「つづまやか」なりとの意に用ひらる。

せみ（名）　滑車なり。轆轤の小なるものにて、之を帆柱などの上に着けて、之に繩を掛けて、引揚ぐるに力を省くがためにする具なり。

せみね（名）　「せつか」に同じ。其の條を參照すべし。

せむ（自動）　「つきつまる」、「せまる」などに同じ。

せんかう（名）　沈香の軟かきが如きものにして、水に入るゝときは、沈みもせず、又浮びもせざるものなりと云ふ。淺香。

せんげ（名）　遷化なり。僧侶の死することに用ひらる。

せんげ（名）　宣下なり。宣旨の下ることにして、臨時に官職に任ぜらるゝなどに云ふ語なり。

せんじやう（名）　幕のごときものにして、之に松などを描きたるものなりと云ふ。漢字の軟障を當つ。「せざう」「せんざう」などゝも云へり。

せんず（自動）　先きにすること。即ち先んずるを云ふ。

せんず（他動）　薬などを煎ること。即ち煎ずること。

せんずまんざい（名）　千秋萬歳の字を用ふ。慶賀すべきことに用ふる語なり。

せんだんまき（名）　重籐の弓の「もとはず」及び「うらはず」の所に斜に籐を

十文字に巻き附けたるものを云ふ。千段巻。

ぜんぢやう（名）　佛教に謂ふ所の入定三昧の稱。

ぜんなん（名）　佛法に歸依する男子の稱なり。女子なれば善女と云ふ。善男、善女など。

ぜんのつな（名）　綱を佛像の手などに掛けて、之を引くものにして、是は佛の力に頼るとの意なり。又葬儀を行ふに際し棺に附けて、引き行く綱をも云ふ。善の綱。又佛の字を當つ。

せんみやう（名）　宣命なり。神事、改元、大赦、立后、立坊、贈位などのとき、其の詔命を文に記したるものにして、一種の文體なり。多くは上古の語を用ひらる。

せぬ（名）　所爲にして、爲すより起ること。「何某のせぬにて、斯くのごとくなりし」など。

そ　ぞ

ぞう（名）　族の音便にして、一族などに云ふ語なり。

ぞう（名）　判官に同じ、「三河のぞうの任はて丶」などあり。

そうがみ（名）　總髪に同じ、頭髪を全くはやして、之を頂に束ねて結ひ置くことなり。

そうぶん（名）　分けて與ふることにして所分の字を當つ。

そうよう（名）　手紙に於いて、他家の家族全體を呼ぶ語なり。御總容樣などの略。

そうろくし（名）　法儀を司り、僧事を録し、且つ諸事を決斷するなどの職にして、足利義滿のとき、始めて此の職を置きたりと云ふ。後、寺社奉行となれるものなり。

ろがぎく（名）　黄菊の稱なり。仁明天皇いたく黄菊を好ませ給ひしかば、當時の年號承和を取つて承和菊と稱へらるゝに至れりと云ふ。

そがひ（名）　背後の方のこと背間

そき（名）　遠く離れたる所を云ふ。

そぎ（名）　木を薄くそぎて作れる小さき板のこと。扮。

そく（自動）　離るゝこと

そくけつのくわん（名）　太政大臣の異稱にして則闕之官なり。

ぞくさんこく（名）　小さき國々を指して云へる語なり。栗散國。

そくしつ（名）　貴人の妾を云ふ語。

そくたい（名）　正禮に從ひて裝束する所の稱なり石帶にて束ねれば斯くの如く云ふ。即ち冠、袍、石帶、下襲、裾、表袴、劍、笏沓などにて身を裝ひたるものを云ふ。

→ろかき　→そくた

そくび（名）　外頸なり。咽を罵りて云ふときの語なり。

そこはかと（名）　「其處」「彼處」「何處」とも云へる語なり或は「其處ばかり」の意なりとも云ふ。

そこばく（副）　確に數の幾許ありやと指示せずして云ふ語なり。「そこばくの年つみくれど、春日野に、生る若葉は、老せざりしか」とあり。

そこひ（名）　奥底の深くして測り知られざること。萬葉集に「大地のそこひのうら」とあり。又古今集に「そこひなき、ふちやはさはぐ、山川の、淺き瀬にこそあだなみはたて」とあることと是れなり。

そこもと（名）　其許なり。「其のもところ」「そこ」などの意に用ひらる○又對稱の代名詞にも用ふ。即ち下輩に對して、「そこもと」などいふ語。

そこら（副）　其處等なり。場所の一定せずして。其の邊と云ふが如き場合用ひらるゝなり。

そしい（名）　疏食にして粗食に同じ。

そじし（名）　背筋にある肉のことなり。脊肉。

そしらぬかほ（名）　「ろ」は發語なり。知れぬ風をなし居る顔のこと。

そそくる（自動）　急がはしく物することに用ふ。

そゞのかす（他動）　漫に進む樣になすことなり。唆す。又慫慂の文字を用ふ。

そそめく（自動）　騒々すること。

そそる（自動）　進み上ること。

そそる（他動）　搖り動かすこと。又俗語の「ゆめく」と云ふ意にも用ひらる。

そそろ（名）　鷙鳥が、食物を喰べ終りたる後、其の皮毛の球のごときものを吐くものを云ふ。

そゞろかに（副）　身の長の如何にも高く聳えて魁偉なる狀に云ふ語なり。

そゞろく（自動）　漫になること。

●そそろ　●そてう

そゞろごと（名）何となく無作法に言ふ語を云ふ。漫言。

そゞろさむし（名）何となく、ゞゞくゝとして寒きこと。

そゞろに（副）何故ともなく心に感ずること坐に。

そゞろばし（形）漫に心の進む狀なり。

そち（名）大宰府の長官の稱にして帥なり。

そち（名）稍身より離れたる所の方角に用ふる代名詞なり又下輩に用ふるところの對稱の代名詞にも用ひらる。「そちは、今より何處に行くにや」など。

そつくび（名）外頸の音便なり。其の條に詳記す。

そつじ（名）言語、擧動の輕卒なることに用ふる語。

そでうつし（名）物を露はすことなく、此の人の手より彼の人の手に移

し送るなどのこと。

そでがさ（名）笠に代ふるに、袖を被ることと袖笠。

そでぎちやう（名）袖を以て、顏を隔て掩ふことなり。袖几帳。

そでぐり（名）狩衣、水干などの袖口の下に大針小針交互に刺したるものに緒を附け、手を使用するとき、其の緒を締め括りて、袖の手頸に垂るゝことを豫防するを云ふ袖括。

そでばん（名）鎌倉、室町の時代に於いて、認可の證として、認めて挿す所の判なり。袖判。

そども（名）山の陰を云ふ。

そね（名）石まじりに成れる瘠地のこと。

そのかみ（副）事ありて其時に溯りし次第。「むかし」など同じ

そば（名）山の端の險岨なる部分を云ふ。俗に所謂「きりぎし」にして岨な

●そてか　●そば

●そは　●そはむ

り

そば（名）　前項の語なる「そは」の轉じたるものにして稜なり、又衣の端をも云ふなり。

そばうり（名）　黄瓜の古名なり。

そばか（名）　梵語なり呪文の末に言ふ語にして、敬言又は善説などゝ譯

そばそばし（形）　物事に角立つと云へる意に用ふ。源氏物語に、「弘毅殿の女御又此の宮とも御中そばそばしき故云々」とあり。漢字の圭角に相當す。

そばむ（自動）　側に居る。「かたよせる」などの意に用ひらる。又傍へ向きて、「くねる」ことにも用ひらるゝなり。「そばみ恨み聞えたまふべきならねば」など。側。

そばむ（他動）　傍に向くる。「引きそばめて急ぎ書きたまふ」。又爪彈きして打ちも向はずと云ふ意にも用いらる。又「かどたつる」などの場合にも用ふる語なり。

そばゆ（自動）　戯るゝこと。

そひ（名）　傍などの意。

そばやかに（副）　聳えて延びやかになる狀に云ふ語なり。

そびら（名）　背中のこと。

そふき（名）　「そほき」の條に詳記す。

そへうた（名）　物に擬へて諷諭する意を詠める歌のこと。

そへに（副）　心に左樣ならと合點したる語に云ふなり。

そほ（名）　色の赤き土の名にして、物に塗るに用ひらるゝなり。

そほき（名）　曾保岐俗に謂ふ曾布支とは、和名抄牛馬の體の狀に記され

●はむ　●そほき

し所なり。又新撰字鏡には、骨部に腹傍空處、曾布支とあるは、是れならん かと云ふ。歴草。

そほつ（名）　案山子の類なり。雨露に濡れそぼちて立てるものゝ意なり と云ふ。

そほづ（自動）　濡るゝこと。「五月雨の、暇しなければ、そほたれて、山田は 水にまかせてぞ見る」。

そほぞ（名）「そほづ」に同じ。

そぼぬる（自動）「しぼしぼと濡るゝ」などのことに用ひらるゝ語なり

そぼふる（自動）「しぼしぼと雨の降ること」などに用ひらるゝ語。

そぼん（名）　白文の書物のこと。

そぼる（自動）　戯るゝこと。

そま（名）　樹木を山に栽ゑ附けて、材木を採るがための場所を云ふ。杣な

り。又杣山より取りし材をば、杣木と云ふ。

そまくだし（名）　杣木をば、川上より流し下すことに用ふ。

そみかくだ（名）　山伏の異名なり。「しらかしの、知らぬ山路を、そみかくだ、高根のつゞき、蹈みやならせる」など。

そみんしやうらい（名）　疫病を避くるがための神符に記する語なり。是は素盞嗚尊が蘇武將來の家に宿りたまいしとき、疫病大に流行し、之が爲めに死するもの甚だ多く、頗る惨憺たる光景を呈せしかば、尊大に之を憐れみたまいて、茅の輪を作りて之を家に掛け、疫病に罹ることを免れしめたるに起れりと云ふ。

そめき（名）　急ぎ騒ぐこと。

そめどの（名）　昔、禁中にありて布帛を染むる場所なり。

そも（接）　上を指して下を記すに用ふる語なり。

そもし（代）　婦人を指して云ふ語。對稱の代名詞なり。

そや（名）　戰陣に用ふる矢の稱なり。征矢。其の製は、三羽にはぎて作る。

そや（名）　初夜のこと。

そよ（副）　物の風に搖り動かされ、相互に觸れて鳴る音に用ふる語なり。漢字の颯然に當る。

そよそよ（副）　前項の「そよ」を重ねたる語なり。

そよめく（自動）　そよ〳〵と音の立つことに用ひらる。即ち戰ぐなり。

そらうろぶく（自動）　空嘯くなり。空を仰ぎ見て嘯くこと。

そらおろろし（形）　心に何となく恐ろしきこと。

そらおぼめき（名）　知らぬ顔をなすことを云ふ。

そらごと（名）　空言なり。即ち僞り言を云ふ。

そらだのめ（名）　其の實なきに拘はらず、空しく頼みになすこと。

そらね（名）　眞實にあらざる鳴聲のこと。又眞似する聲のことにも用ひらる。虚音。

そらぬ（名）　詐りて寐たる風をなし居ること。虚寐。

そらみつ（枕）　大和と云ふ語に掛けて用ふる枕詞。

そる（自動）　目的の處へ行かずして、其以外の場所に行くこと。

そる（名）　「せる」即ち所爲に同じ。爲したるがために起る事故。

た、だ

だいおん（名）　大將軍の一にして大歲神の皇后なり。曆にある日。

たいくわい（名）　造物者の名。

だいくわん（名）　名代の職なり。又武宗の世にありて、地方官として其の管内に於ける年貢、公事、人別などを官章する役目。代官。

だいご（名）　酥を精製して取りたる液にして、甚だ甘味なり。藥用に供すといふ。醍醐。

だいごくでん（名）　古、八省院の中央に任じ、天皇が朝に臨御せられたまふ正殿の稱なり。大極殿一に大安殿と云ふ。

だいが（名）　佛像を載する臺なり。又器物を載するにも用ひらる。臺座。

だいし（名）　舵のこと。「たぎし」の音便なり。

だいし（名）　佛家に於いて女人の戒名の末句に添ふる語なり。大姉。

たいしやう（名）　謝罪證文のこと。意狀。

だいしやこく（名）　太政大臣の唐名を云ふ。

だいしやうゑ（名）　天皇御即位の後始めて行はせらるゝ所の新嘗の稱。神事の最も重大なるものゝ一にして、大嘗會の文字を當つ。

だいぜんしき（名）　大膳職にして　おほかしはでのつかさ。宮内省に屬し膳部の事を掌る職なり。

だいじいし（形）　疎略、等閑、輕々しきことなどの意に用ふる語なり。

だいじいり（名）　昔の皇宮の稱にして、大内裏なり。

だいのや（名）　對屋の文字を當つ。古、禁中、貴族などの殿又は邸に於いて、寢殿に對して斜に向ひ、別に構造したる家屋のこと。對する屋なれば斯くの如く云ふ。此の對屋は、廊下傳ひにて往來することを得るものとなれり。東の對、西の對など、略して云へり。

たいふ（名）　大夫なり。五位の通稱とす。無官の大夫は公卿の意にして宮位なきものゝ稱。「無官の大夫敦盛」など。

たいふ（名）　大輔なり。省の次官の稱を云ふ。

だいぶ（名）　職に置かれし長官の稱號なり。大夫と書く。即ち中宮職、東宮職、大膳職などの長官。

たいめ（名）　對面の約なり。相向ひ會ふこと。

たいらう（名）　天皇の社稷の祭の稱なり。

だうかうだな（名）　道幸棚なり。道幸と云へる人の創意に成れる棚のこと。是は茶室の爐の傍の壁に造れる袋戸棚の如きものにして、茶器の置所なり。

たうばり（名）　賜はる所の營祿の類なり。

たうばる（他）　動賜はると云へる語の延びたるもの。

たうまちくゐ（名）　物事の極めて群り入り亂れたるに譬へて云ふ詞。稻麻竹葦の文字を當つ。

たうまるかご（名）　唐丸籠なり。唐丸と云へる鳥を入るゝ圓き竹籠。又其形に似たるものにして、平民の重罪者を護送するに用ふるものにも、此の名あり。是は其の上に網を被へり。

たうめ（名）　いするせの稱。起婦、起女などの類なり。又いたる狐の稱にも用ひらる。

たうめ（副）　「もはら」の古言にして、專なり。

たえす（自動）　絶え盡くること。

たえだえに（副）　殆ど絶えんばかりとなりて「とぎれ、とぎれ」になること。

たえて（副）　「さらさらに」と云ふ意なり。「世の中に絶えて櫻のなかりせば」などあり。

たかうな（名）　「たかむな」の音便なり。筍のこと。

たかうなかたな（名）　元服のとき理髮に用ふる所の器なり。箏刀。

たかさご（名）　播摩の地名に高砂と云へる所あり。又尾上と云へるもなりて、此の二者は、常に共に相連ねて唱へらるゝよりして、通常の山の尾上に掛けて呼ぶことゝなれるものなり。「高砂の尾上の松」、「高砂の尾上

の櫻」「高砂の尾上の鹿」などの如し。

たかせ（名）　高瀬にして川の瀬の淺き所を云ふ。

たかせぶね（名）　高瀬舟なり。高脊の義にして其の形に依りて、斯くの如く名づくるものなりと云ふ。今又川舟の一種にて。頗る火なるものゝ稱にも用ひらる。

たかだかに（副）　高く仰ぎて、遥に望見する狀を云ふ語なり。「石上振の高橋たかだかに、妹を待つらむ、夜ぞふけにける」など。

たかだぬき（名）　鷹司貫にしてこの字を當つ鷹を使ふときに用ふる手貫なり。

たかつかさ（名）　兵部省に屬せるものにして鷹を飼養することを司る所。鷹司。

たかつき（名）　土器の下に曲物の輪を添へたるものにして、食物を盛る器なり。後世に至りて、全體を木に作り附けに造り、之を漆にて塗れるものゝ出來れり。高附にして一名を腰高と云ふ。

たがぬ（他動）　束ぬること。綰。

たかね（名）　高き峰の約なり。

たかね（名）　高音にして音樂の調子の高きを云ふ。

たがね（名）　飴の古名。

たかばかり（名）　竹製の尺度にして、竹量の義なりと云ふ。

たかひかる（枕）　日といふ字に掛けて云ふ枕詞。

たかぶ（自動）　「たかぶ」に同じ。

たかべ（名）　其形鴨に似て小さく、尾長く、背に斑紋あるものなりと云ふ。「人潜がず、有らくも知るし潜する鵜と高部を、船の上にすむ」など。

たがべし（名）　腕押の伎なりと云ふ。

たかみくら（名）　天皇の着き給ふ御座の稱。又天皇の御位の稱にも用ひらる。

たかる（自動）　立ちかゝり集る意に用ひらる。

だきかご（名）　抱籠なり。夏夜寐ぬるに暑ければ之を抱きて、涼を取ると云ふ。竹夫人なり。

たきぎこる（枕）　鎌倉山に掛けて乞ふ枕詞なり。

たきぎののう（名）　奈良の興福寺なる前の芝生に於いて、陰暦二月にありて、七日間執行する所の神事の稱なり。

たきぐち（名）　藏人所に屬して、禁中を守護する所の武士の稱なり。御湯殿の瀧の下に勤番するを以て、斯くのごとく稱せらるゝなり。

たきし（名）　舵に同じ。此の舵は、現今の製作と異なることあるが如し。

たきつ（名）　淺なり。逆卷く、沸き上るなどの如し。

たきぶさ（名）　髻の古名、現今に所謂「たぶさ」のことなり。

たく（他動）　搔きあげ、又は、取上げなどの意に用ひらる。

たぐ（他動）　手上ぐの約なりと云ふ。擡又は「あぐ」などの意に用ひらる。

だくあし（名）　馬の足並の拍子なり。是は、未だ駈足とならずといへども稍忙しくなりたるものを云ふ。

たくじり（名）　古にありて、てづくねの陶器の稱なり。

たくづぬの（枕）　白と云ふ語に掛けて云ふ枕詞なり。栲綱。

たくなはの（枕）　長きと云ふ語に掛けて云ふ詞なり。栲縄。

たくぶすま（枕）　白を云ふ語に掛けていふ枕詞。栲衾。

たくみどり（名）　鳥の名「みゝさざい」に同じ。

たくめ（副）　專なり「たうめ」の條を參照すべし。

たぐり（名）　吐くこと。

たぐる（他動）　手繰るにて、手許へ繰り寄すること。

たけたかゆび（名）　「なかゆび」に同じ。

たけだち（名）　立ちたる高さにして、「立丈」なり。

たけのうのふ（名）　親王、皇子の異稱を竹の園と云ふ。茲に生ひ出でたまへる人々のこと。竹の園生。

たけぶ（自動）　猛く叫ぶこと。

たけぶんがに（名）　平家蟹に同じ。尊良親王の臣、秦の武文、元弘の乱に當りて、兵庫の湊川に戰死せるが、之が化したるものなりとて、斯くは名づくるものなり。

たける（名）　上古にありて、一群の猛き夷族の長を云ふ稱呼なり。梟帥。「八十梟帥」、「熊襲梟帥」などの如し

たご（名）　農民のこと。「早苗とる、たごのもすそも、あらなくに濡衣をのみ、なぞか着るらむ」。田子なり。

たご（名）　擔ひ桶のこと。田籠の義と云ふ。或は云ふ。田子桶の義にして、河田子の浦に於て、潮汲桶に用ふるに起るると云ふ。

たごし（名）　人の手にて擡げ行く輿のことなり。

たこむら（名）　「たゞむき」にして腕に同じ。手腓の儀なり。

たざく（名）　短冊に同じ。

たしだしに（副）　「たしに」の條に詳記す。

たしに（副）　慥にと云ふ意。

たすけのほね（名）　「あばらぼね」に同じ。

たそがれ（名）　夕暮時のことなり。誰も彼の見別けの附き難き時分のこと

ただ（名）　何の廉もなきに云ふ語。徒。

たたあはせ（名）　相撲の行司・立合のこと。

たたごと（名）　徒言なり。「ありのまゝのことば」を云ふ。

たたすつかさ（名）　彈正臺に同じ。糾司の義なり。

たたずまひ（名）　たゝずまふこと。又立ちたる容子を云ふことにも用ふ。

たたち（名）　直なる路のこと。「月夜好み、妹にあはんと、直道から、吾は來つれど、夜ぞ深けにける」など。

たたなめて（枕）　射と云ふ語に掛けて用ふる枕詞。楯並なり。「たた」は、楯の轉なり

たたばし（形）　滿ち足ること。又大きく嚴なることに用ひらる。

たたふ（自働）　水の滿つること。滿ふなり

たたへごと（名）　德行を賞美して褒むる語なり。

たたらめ（名）　「たゝれめ」の古言。曩なり。

たたり（名）　柱を方形の臺に立て、絲を絡ひて引きかくるもの。

たち（名）　家のこと。「やかた」にして館の字を用ふ。

たちがみ（名）　髮に同じ。

たぢから（名）　手力なり。力と云ふに同じ。

たちわき（名）　東宮坊の侍衛の士に云ふ稱。帶刀にして音便の太刀佩なり。

たちはめ（名）　今の雪踏の類にして、靴の下に牛皮を着けたるもの。

たちまちのつき（名）　陰曆十七日の夜の月のこと。立ちやすらひて、山の端を出づれば斯くのごとく云ふものなり。

たづ（名）　田鶴なり。鶴といふに同じ。田鶴の略にして、田に居れば、斯のごとく云ふなり。

たつき（名）　杣人の用ふる大なる斧のごときものを云ふ。

たづたづし（形）「たどたどし」に同じ。夕闇は、路たづ〳〵し、月待ちて、往ませわが背子その間にも見ん」など。

たつたひめ（名）秋を司る神の名なり。大和の平群にます女神なり。

たつび（名）田螺に同じ。田中螺。

たて（名）戰場に用ふる具にして、厚板にて作り、これを以て、敵の矢を防ぐものとす。楯。

たて（接尾）盛に飾ること。「だて」なること。「何達姿」など。

たてあかし（名）松明の類を云ふ

たてがみ（名）馬又は獅子などの頂に叢生せる長き毛なり。

たてぼし（名）魚を漁する一の方法なり。川口のごとき場所に、網を立てゝ張り、潮の干るに從ひて魚を捕る法。立干。

たてまだす（他働）「たてまつる」に同じ。

たてもの（名）兜の前庇の上なる眞向に附くる飾り物の名。一に之を龍頭と云ふ。又頭立つものをも云ふ。大立物などの類なり。

たてやま（名）禁山に同じ。立入り又は竹木を伐ることを禁じたる山のこと。

たどを（名）「たつぎ」に同じ。方便なり。「新羅へか、家にか歸る、壹岐の島、行かん多登伎も、思ひかねつも」など。

たどころ（名）田所なり。田地のこと。

たとしへなし（形）喩へなきこと。「たとしへ」の「し」は、休み詞ならんとも云ふ。「たとしへなきもの、夏と冬と。夜と晝と、黑きと白きと」など。

たどたどし（形）迦る狀にして、「れぼつかなし」「確とせず」などの意に用ひらる。

たとふ（他働）　他の物又は事に擬へて云ふ語。譬

たどぼし（形）　「お」は發語なり。遠しといふに同じ。

たどりぼら（名）　妾腹の子を云ふ。

たなうち（名）　「たなどころ」に同じ。手の内の轉じたるものなり。

たなうら（名）　「たなどころ」に同じ。手の裏の轉じたるものなり。

たなぎやう（名）　棚經なり。盂蘭盆會に際して、僧が、生靈の棚に對して讀經することを云ふ。

たなしし（名）　棚肉の義にして膜に同じ。

たなすゑ（名）　手の端のこと。

たなすゑのみつぎ（名）　貢にする手本の稱にして、女の手末にて造れるものなれば、斯くの如く云へり。

たなそこ（名）　「たなごころ」に同じ掌。

たなつもの（名）　田に成るものを云ふ。即ち稻のこと。

たなばたつめ（名）　古にありて、機織る女の稱なり。「我が爲めと織女の、其の屋戸に、織る白布は、織りてみんかも」など。又織女といふ星の稱にも用ひらる。

たなびく（自動）　雲、霞又は煙などの薄く横に引くこと。漢字の靉靆のこと。

たなひぢ（名）　肱と云ふに同じ。

たなまた（名）　指と指との間にして、手の股のこと。

たなれ（名）　手馴にして、手馴るゝこと。

たなゐ（名）　春季苗代を起すときに於いて、其の籾種を浸さんがために掘る井戸のこと。「秋かりし、むろのおしねそ、思ひ出でゝ、春ぞたなゐに、種かしける」など。

たに（名）調庸に納むる外に、自用のためにし、又は、交易に用ふる所の布を稱していふ語なりと云ふ。手布の轉なりと云へり。

たにぎる（自動）手握る。手に握り取ることに用ふ。

たにぐく（名）蟾蜍の古名なり。谷間に棲みて「くく」と鳴くものなれば、斯くの如く云ふなりとぞ。

たぬし（形）樂しに同じ。「睦月たち、春の來たらば、斯くしこそ、梅を折りつゝ、たぬしきをへめ」など。

たはし（形）淫れたる狀態のこと

たばしる（自動）「た」は發語、又は、飛走の略なるべしと云ふ、飛び走ると云ふ意に用ひらるゝなり。

たばふ（他動）保つこと、「かばふ」ことなどに用ひらる。回護する意を現はすを云ふ。

たはやすし（形）「たやすし」に同じ、容易の文字を當つ。

たはる（自動）戯むること、又男女の互に禮ならずして交はることにも用ひらる。淫の字に相當す。

たばる（他動）「たまはる」の約轉にして、賜ること。

たはれめ（名）遊女のこと。「うかれめ、あそびめ」など皆同じ。

たはれを（名）放蕩する男の子。

たび（名）手火なり。松明の類を云ふ。「天皇の、神の御子の、いでましに、手火の光か、幾許照りたる」など。

たび（名）茶毘なり。火葬に同じ。梵語なり。

たびしがはら（名）古瓦などゝ云ふに同じ。之に寄せて數にもあらぬ賤しき民に云ふ語なり。

たびしよ（名）旅所なり。神社の祭典に當り、神輿の渡御するとき、暫らく